

雪の音

ゆき おと

Vol.156

令和8年2月15日発行



卷頭言	北陸地域の発展に向けて	建設コンサルタント協会北陸支部長 吉野清文	1
特集	一般国道49号 水原バイパス全線開通について	国土交通省 北陸地方整備局 新潟国道事務所	2
寄稿文	妙成寺を「調べ、守り、伝える」。羽咋市のとりくみ	羽咋市 教育委員会 中野知幸	6
お知らせ	令和7年度 倫理・法令に関する講習会 デジタル技術活用時の法律上の留意点—AIを中心に—	総務部会 倫理・法令委員会	10
お知らせ	新潟県立新潟工業高等学校 出前講座 ～道路事業における建設コンサルタントの仕事 ／国道7号栗ノ木・紫竹山道路の見学～	技術部会 道路委員会	12
お知らせ	令和7年度 道路トンネル現場見学会 利賀ダム工事の現場見学	技術部会 道路委員会・トンネル委員会	16
お知らせ	令和7年度 橋梁現場見学会 金沢外環状道路 千田高架橋 上部工工事	技術部会 橋梁委員会	18
お知らせ	令和7年度 まちづくりセミナー研修 (石川県能登地域 他)	技術部会 都市計画委員会	20
お知らせ	令和7年度 建設環境委員会技術セミナー 開催報告	技術部会 建設環境委員会 広報部会 広報委員会	22
お知らせ	【開催報告】皆でフックアップ! 北陸建コン若手エンジニア 2025	技術部会 若手技術者ワーキンググループ	24
お知らせ	新潟県 小学校・中学校・高校 「土木出張PR」参加報告	技術部会 若手技術者ワーキンググループ	26
	会員名簿 役員・委員会名簿	事務局	28
	編集後記	熊倉晃	

〔題字〕

元北陸地方建設局長
廣瀬利雄 挥毫

〔表紙・裏表紙写真〕

タイトル 冬の新越道大橋
撮影地 新潟県十日町市松代

卷頭言

北陸地域の発展に向けて

建設コンサルタント協会北陸支部長

吉野清文



新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては清々しい年をお迎えになったこととお喜び申し上げます。

今年は午年です。午年は「エネルギーの最盛期を迎える、物事を大きく進展させる年にあたる。」といわれています。一昨年の能登半島地震などの大規模災害からの復旧・復興が大きく前進し、地域の発展につながることを祈念しています。

ところで、新型コロナウイルス感染症の脅威は収まったものの、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区などの国際紛争の激化、円安の進行、さらには「地球沸騰化」と表現されるような異常気象なども相まって輸入物価の上昇で実質賃金が目減りするなど日本経済の先行きが不透明な状況でしたが、さらに、トランプ関税の発動やMAGA政策の推進により、一層不透明感が増してきたようです。

そのような中で、昨年6月に激甚化する自然災害や老朽化するインフラに対応するための事業規模が5年間で20兆円強の国土強靭化実施中期計画が閣議決定されました。

今年は国土強靭化実施中期計画の初年度に当たります。昨年の臨時国会において補正予算で約3.15兆円+α（国費約1.9兆円）の国土強靭化関係予算が計上されました。5年間の事業規模からするとやや少ないよう思いますが、前年度を上回る規模になっています。さらに、公共事業関係費の事業規模としては昨年度の補正約2.4兆円に対し、今回は約2.6兆円の規模となっています。

今後、引き続き安定的かつ計画的な事業執行という観点からの予算措置を期待したいと思います。

北陸地域は「災害列島日本」の中でもより一層厳しい自然条件下にある地域です。国土強靭化の理念である「人命の保護」、「地域の重要な機能の維持」、「住民の財産及び公共施設の被害の最小化」、さらには「被災した後の迅速な復旧復興」を目指して、安全・安心で活力ある北陸の地域づくりに向けてハード・ソフト両面で解決すべき課題が山積しています。

また、今後より一層「自立・分散・協調」型社会の形成に向けて、気候変動の影響、グリーントランスフォーメーションの実現、デジタル技術の活用などの社会情勢の変化を踏まえた対応が求められています。

一方で、日本では人口減少が進み超高齢化社会が進行する中で、中長期的に担い手の確保が課題になっていますが、とりわけ、建設産業においては大きな課題です。ワークライフバランスの確保や生産性の向上に向けて、工期の平準化などの環境整備に向けて関係機関に働きかけていく必要があります。

建設コンサルタントは建設産業の川上部門を担う立場として常日頃から技術はもとより社会の構成員としての知識の習得など自己研鑽に努め、安全・安心で活力ある北陸の地域づくりの一翼を担えるよう、また、魅力ある業界になるよう会員の皆さんとともに努力していきたいと考えています。

最後に、今年が皆様にとって良い年になることを祈念し年頭のご挨拶とします。

一般国道49号

水原バイパス全線開通について

国土交通省 北陸地方整備局 新潟国道事務所

1. はじめに

令和7年6月8日、国道49号水原バイパスが全線開通を迎えた。水原バイパスの全線開通により、阿賀野市街地における自動車交通の安全で円滑な交通環境の改善が図られるとともに、通過交通のバイパスへの転換による交通騒音の低下が期待されるほか、所要時間の短縮により阿賀野市・阿賀町と新潟市との交流の活発化が期待されている。

本稿では、水原バイパスの事業概要をはじめ、全線開通に至るまでの25年にわたる整備過程を振り返るとともに、その整備効果を報告する。

2. 事業概要

国道49号（福島県いわき市～新潟市）は太平洋側と日本海側を結ぶ主要幹線道路であるとともに、阿賀野市、阿賀町と新潟市との交流を支える道路として重要な役割を果たしている。

水原バイパスは、阿賀野市街地における交通混雑や交通事故、自動車交通による交通騒音等の生活環境に与える影響を解消し、安全で円滑な交通を確保するとともに、阿賀野市の将来のまちづくりを支援することを目的として計画された延長8.1kmの道路である。

当該バイパスは、平成12年の事業着手後、令和4年12月までに阿賀野市百津から同市下黒瀬間5.4kmが暫定2車線で開通済みであり、令和7年6月に2.7kmが開通し、全線暫定2車線開通した。

＜事業概要＞

事業名	一般国道49号 水原バイパス
起終点	新潟県阿賀野市寺社～同市下黒瀬
延長	8.1km
幅員	高盛土区間:21.0m (2.0-7.0-3.0-7.0-2.0) 低盛土区間:28.0m (3.5-2.0-7.0-3.0-7.0-2.0-3.5)
道路規格	3種1級
設計速度	80km/h

＜事業経緯＞

平成11年	都市計画決定
平成12年	事業化
平成15年	用地着手
平成17年	工事着手
令和4年	5.4km 暫定2車線 開通 (阿賀野市百津から同市下黒瀬間)
令和7年	2.7km 暫定2車線 開通 (阿賀野市寺社から同市百津)



図一1 事業位置図

3. 事業の特徴

(1) 道路構造(高盛土部、低盛土部)

水原バイパスは、混雑の著しい阿賀野市街を迂回するため、一級河川阿賀野川右岸に広がる圃場部を通過する形で計画され、国道460号やJR羽越本線など交差条件を考慮した10m前後の高盛土区間と阿賀野川浸水想定高さを考慮した低盛土区間で構成されており、同一バイパス内で道路構造が異なる特徴を有している。

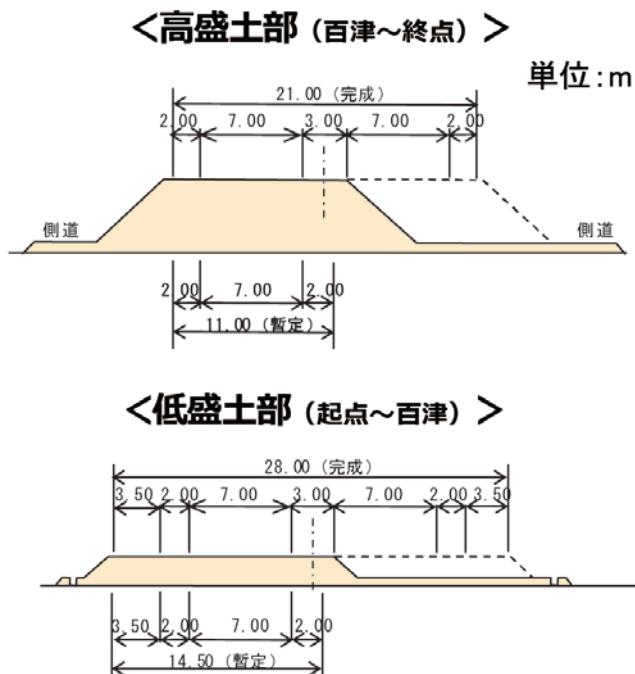


図-2 標準横断図

(2) 軟弱地盤対策

計画地は、一級河川阿賀野川及びその支川が運搬した砂・粘土等が氾濫時に堆積して形成された氾濫原平野であり、地質は上・中層部に沖積層が広く分布し、上層部はN値1～2を示す軟弱な粘性土とN値が概ね20以下の緩い砂質土層が不規則な互層をなしてお



写真-1 軟弱地盤対策の状況

り、バイパス建設による上載荷重による圧密沈下やすり破壊への対策として、サーチャージ工法を主体とした軟弱地盤対策を実施している。

(3) 埋蔵文化財

計画段階よりコントロールポイントとなる既知の遺跡を概ね回避するルートを選定したが、阿賀野川旧河道の自然堤防に隣接する地域であることから、試掘調査により古代から中世にかけての遺跡が数多く確認され、本掘調査完了までに約15年を要している。

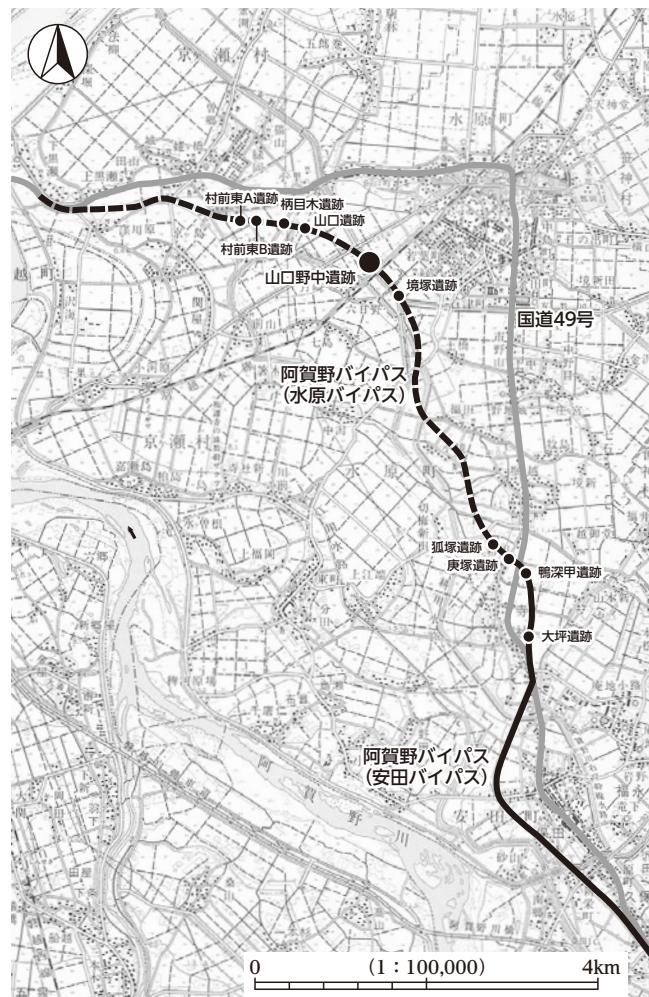


図-3 バイパス上の遺跡位置



写真-2 中世の集落井戸遺構

4. 整備効果

令和4年暫定供用及び令和7年の全線供用による整備効果について示す。

(1) 交通転換による混雑の緩和

図一4に示す計測地点において、水原バイパス全線開通前後の交通量の変化を調査した（図一5）。百津～下黒瀬間の部分開通後、現道（旧国道49号）と水原バイパスの断面での日交通量は開通前に比べ約28%増加し、全線開通後は約31%増加した。また、現道の日交通量は開通前と比べ、全線開通後は約3割減少し、全体の交通量の48%が水原バイパスを利用している。通過交通等が水原バイパスに転換されたことで、現道の交通量が大幅に減少し、現道の交通混雑が緩和された。



図-4 日交通量調査地点位置図
(計測地点A:現道、計測地点B:水原バイパス)

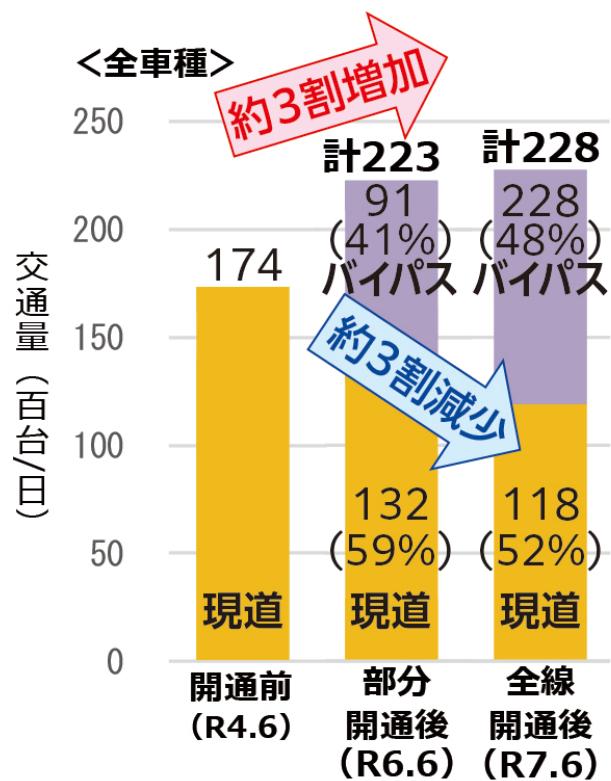


図-5 水原バイパス区間の日交通量変化(平日)

図-6に水原バイパス開通前後の新潟市方向への旅行速度の変化を示す。開通前の旅行速度は約40km/hであったが、全線開通後は約55km/hと旅行速度が向上した。水原バイパスによって、走行の円滑化が確認された。

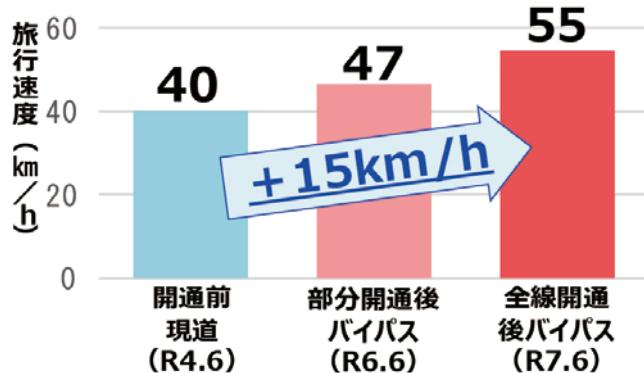


図-6 旅行速度変化(平日)
(鴨深交差点から木津IC)

(2) 阿賀野市の産業・観光支援

水原バイパスの起点付近には、新潟県営東部産業団地が立地している（図一7）。当該団地は、新潟市中心部や新潟東港へのアクセス性に優れ、平成17年度の着工以降、進出企業数は23社に達し、令和4年の部分開通後にもさらに4社が進出した。令和7年の全線開通により、東部産業団地と新潟東港、日本海東北自動車道および北陸自動車道とのアクセス性が一層向上し、地域産業の発展および物流の円滑化への寄与が期待される。

また、五頭温泉郷、安田温泉、レジャー施設（遊園地）などの観光施設が点在する阿賀野市では、水原バイパスの整備により観光地へのアクセス時間の短縮やルートの多様化が実現し、観光客増加が見込まれる。



図-7 産業・物流支援（県営東部産業団地）

(3) 救急救命活動の支援

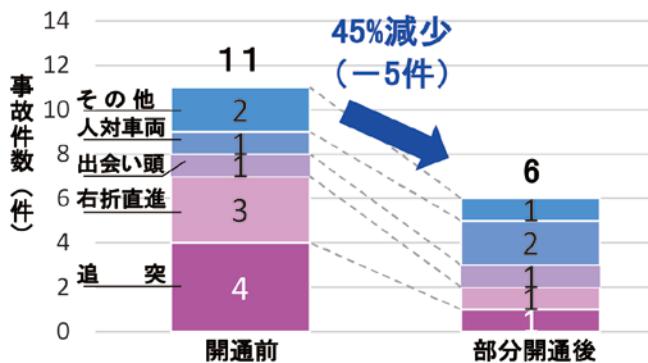
阿賀野市から新潟市民病院（第3次救急医療機関）への搬送において、従来より国道49号は主要な救急搬送ルートであったが、水原バイパスの整備により、同病院への30分圏域が拡大し、約1万1千人の住民が新たに30分圏内に含まれるようになった。さらに、所要時間の短縮が1分以上となる地域も拡大し、その対象人口は約2万6千人にのぼる。これにより、救急医療が迅速化し、救命率の向上が期待される（図一-8）。



図一-8 阿賀野市から新潟市民病院へのアクセス模式図

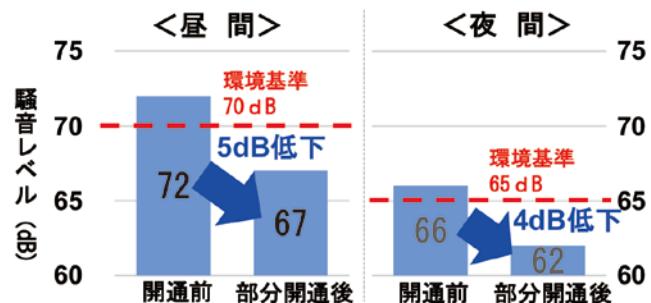
(4) 生活環境の改善

旧国道49号現道（移管済み区間）では、自転車通勤・通学の利用が多く、歩行者・自転車が関係する重大事故が多数発生していた。バイパス部分開通により、交通事故件数は45%減少したが、全線開通により市街地を通過する交通がバイパスへ更に転換されることで、現道の交通事故の減少が期待される（図一-9）。



図一-9 部分開通後の交通事故件数の変化
(道の駅阿賀野交差点～大野交差点)

また、バイパス開通前の現道では沿道騒音レベルが環境基準を上回っていたが、令和4年の部分開通後の調査では、騒音レベルが最大5dB低下し、昼夜ともに環境基準値を下回る結果となった。全線開通により交通が転換し、更なる騒音低減と生活環境の改善が期待される（図一-10）。



図一-10 部分開通前後の現道の騒音レベルの変化

（調査地点：阿賀野市山口町2丁目1）

5. まとめ

水原バイパス全線供用にあたり、貴重な土地を提供いただきました地権者の皆様、並びに事業推進にご支援・ご協力をいただきました関係者の皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。水原バイパスが地域の安全・安心な暮らしやまちづくりに寄与し、地域の持続的な発展につながることを期待しています。



写真一-3 開通記念イベントの様子

妙成寺を「調べ、守り、伝える」。

羽咋市のとりくみ

羽咋市教育委員会 中野知幸

1. 羽咋の古刹 妙成寺の建造物

石川県羽咋市滝谷町の妙成寺（みょうじょうじ）は、鎌倉時代の永仁2年（1294年）に開山された、能登を代表する古刹です。日蓮宗の北陸本山として知られるこの寺院は、開山した日像上人ゆかりの古文書『法華経弘通許状』（弘安11年・1288年）、『日像曼荼羅本尊』（暦応元年・1238年）などの鎌倉時代にさかのぼる貴重な史料を今に伝えています。

妙成寺が現在のような壮大な伽藍の姿を整えたのは、江戸時代に入ってからのことです。慶長8年（1603年）に加賀藩三代藩主・前田利常の生母である寿福院の菩提寺になったことを契機に、加賀藩前田家の厚い保護を受けるようになります。寿福院は熱心な法華経信者で、その発願により妙成寺の伽藍整備が進められ、本堂、祖師堂、五重塔など、現在、重要文化財になっている主要な建造物が17世紀初頭に次々と建立されました。

特筆すべきは、伽藍の保存状態の良さです。現在、境内には国指定重要文化財10棟、石川県指定文化財2棟、羽咋市指定文化財1棟がありますが、建立以来、大きな建て替えや後世に追加された建築も無く、建立当初の状態を良好に保っており、日蓮宗の古式の伽藍配置を現在に残した、能登を代表する「歴史的建造物の宝庫」と呼ぶにふさわしい寺院です。



妙成寺五重塔

なかでも、元和4年（1618年）建立の五重塔は、北陸地方唯一の五重塔建築で、華麗な彫刻と古式の堅固な構造が採用された、加賀藩御用大工の高い技術を伝える名建築と言われています。妙成寺五重塔は、寺院のシンボルとなる建造物であり、北陸特有の激しい風雪に耐え、令和6年能登半島地震にも耐え、建立から400年以上にわたって能登の宗教的景観を形作ってきました。妙成寺は、地域の信仰の歴史を示す代表的な文化財でもあります。羽咋市では、この妙成寺の建造物の国宝指定を目指し、「調べる（調査研究事業）」、「守る（保存修理事業）」、「伝える（価値の普及事業）」という三本柱を軸とした事業を推進しています。

2. 妙成寺の建造物を「調べる」

妙成寺の建造物の価値は、象徴的な五重塔だけにあるのではありません。もうひとつの見どころは、国指定重要文化財の「本堂・祖師堂・三光堂」の三つの建物が並び立つ「三堂並置」という独特的の伽藍配置です。

寺院の本尊を祀る「本堂」を中心、右手に宗祖の日蓮を祀る「祖師堂」、左手に守護神の三光天子を祀る「三光堂」を配置するこの形式は、日蓮宗の教えを建造物で具現化した法華寺院の古式の伽藍配置とされ、現存するのは、全国でも妙成寺だけと言われています。

この三堂は、一般的な寺院に見られるような平坦な土地に建てられているわけではありません。妙成寺は、丘陵地を切り拓いた地形に建てられているため、土地には起伏があります。実際に、三堂のうち三光堂は一段高いところに位置しています。しかし、参拝者がこの三堂に対面すると、不思議なことに、三堂の軒高（屋根の軒の高さ）と棟高（屋根の棟の高さ）が揃えられ、水平軸が整っていることがわかります。

これまでの調査研究事業により、この視覚的な調和は「計算された設計」によるものであることが明らかになりました。三光堂は、高さを抑えて重心を低く設計し、本堂は、寺院の核となる建物として堂々と大き

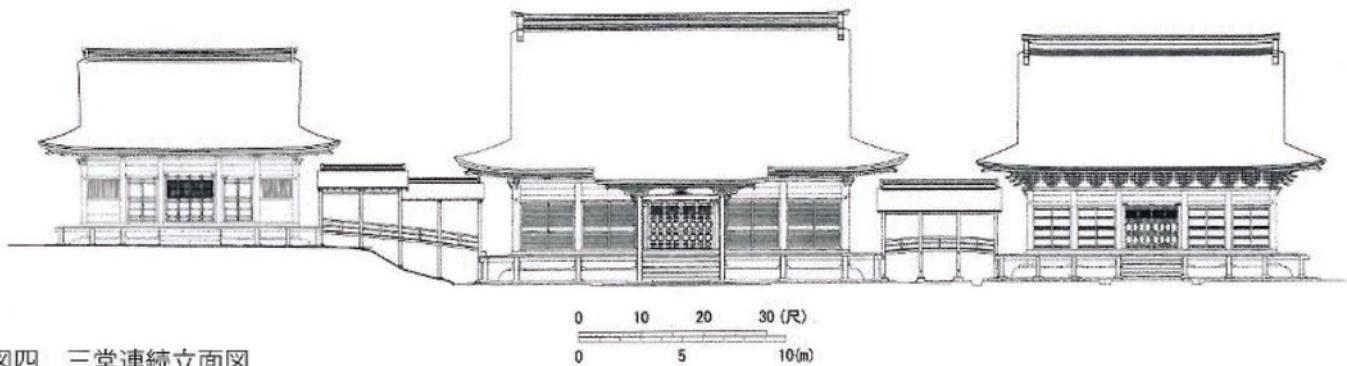
く見せ、祖師堂は、柱を継いで敢えて屋根を高く持ち上げることで、全体の視覚的なバランスを整えていることが分かりました。土地の起伏という制約を克服しながら、寺院の宗教的なメッセージを建造物の規模と配置で視覚的に伝えるという、加賀藩大工の卓越した建築設計思想と技術を見ることができます。

羽咋市では、こうした調査研究事業を長期にわたって実施し、建造物の価値を調べてきました。妙成寺の建造物には、文化財としてどのような価値があり、それは地域や社会にとってどのように大切なのか。それらを明らかにして、建造物を「守る」、保存修理事業に生かしていく必要があるからです。文化財建造物の保存修理には非常に大きな事業費が必要で、行政からも税金による補助金が投入されます。調査研究により守るべき価値を明確化し、修理事業の必要性について市民の理解を得ることは、行政側の責務でもあります。文化財を「守る」ための土台は、この「調べる」という調査研究によって支えられているのです。

3. 妙成寺の建造物を「守る」

文化財建造物を未来へ継承していくための基本は、適切な時期に屋根の葺き替え工事を行うことがあります。屋根が劣化して雨漏りが生じると、内部の木部や構造にも影響が及んで、修理の規模が徐々に拡大してしまいます。

妙成寺の建造物は、多くが柿葺き（こけらぶき）という薄い板材を何層にも積み重ねた伝統的な技法を用いています。これらは自然素材であるため経年劣化を避けることができません。また、妙成寺の境内は日本海に近く、北陸特有の冬季の激しい季節風に常に晒されています。このため屋根材の劣化も早く、突発的な暴風による飛散や損壊も日常的な脅威と言えます。冬季に最大風速30メートル級の台風並みの暴風を記録する羽咋市において、妙成寺が400年以上にわたり、その姿を維持し続けてきた事実は、歴代の僧侶や地域の人々が、加賀藩の保護を受けながら、絶えず修理し、維持し続けてきた歴史そのものと言えるでしょう。



図四 三堂連続立面図

妙成寺の三堂並置[三光堂（左）・本堂（中央）・祖師堂（右）] 『妙成寺文化財総合調査報告書』2020より

こうした厳しい環境下で文化財を適切に保存していくためには、定期的な「文化財パトロール」が欠かせません。夏季の集中豪雨、秋季の台風、冬季の暴風雪などが起これば、その都度被害の有無を目視で確認することが必要です。しかし、寺院の屋根は非常に大きく、地上から見上げるだけでは、細部の異変に気付くことができない場合もあります。

そこで近年では、ドローンを用いた現地確認も行っています。五重塔最上部の五層目の屋根は、どうしても死角が多いため目視が行き届かず、離れた地点からのズームカメラでの撮影しか方法がありませんでした。しかしドローンを使えば、高所の現状を詳細に把握することができ、破損を早期に発見して適切な保存修理につなげることが可能になります。令和5年度に実施した五重塔の五層目の屋根修理工事は、このドローンによる現地確認がきっかけとなりました。文化財を適切に守るために、こうした新しい技術の導入も必要だと実感しています。

4. 妙成寺建造物の価値を「伝える」

文化財保護の理念は、「保存」と「活用」で成り立っています。適切な「保存」がなければ「活用」は成立しませんし、逆に、「活用」を通じて価値を市民に知ってもらわなければ、大切な文化財を「保存」し続けようという社会的な意識を育むことができません。文化財保護では保存と活用は一体であり、両者を互いに循環させることができます。

そして、この両者の基盤となっているのが、先に述べた「調査研究」です。調査によって価値が明確でなければ、保存も活用も根拠のない不確かなものになってしまいます。文化財の保存と活用を下支えしているのは調査研究であり、この「調べる」「守る」「伝える」という三者が緊密に連携することが大切と考えています。

羽咋市では、この三者をより一体的なものとするため、デジタル技術を活用した事業に着手しました。令和6年度には、妙成寺五重塔、本堂、三光堂、祖師堂の4棟の三次元計測を実施し、地上レーザー計測とドローンによる写真測量を組み合わせた高密度な「3D点群データ」を作成し、建造物の3Dモデルデータを作成しました。これにより従来よりも精度の高い平面図や立面図を作成することが可能となりました。これは、今後の調査研究の基盤となるだけではなく、将来

の保存修理工事においても欠かせない重要な基礎資料になります。

さらに、3Dモデルデータは、「デジタルアーカイブ」として保存することで、建造物の三次元形状と現状を未来へ残していくことが可能になります。令和6年能登半島地震では、多くの文化財が甚大な被害を受けましたが、被災した文化財を修復するためには、被災前の詳細なデータが不可欠です。しかし、古いアナログ写真や図面などの限られた資料しか残されていないケースも少なくありません。平時から文化財を3Dデータで記録してアーカイブしておくことは、「文化財防災」の観点からも極めて有効であり、近年増加している自然災害を考えると、この三次元計測による備えは、避けては通れないことと考えます。

羽咋市では、こうした文化財のデジタル化事業の成果を、広く一般の方々に向けて公開するためにWEBサイト「羽咋市デジタル博物館」を開設しました。このサイトは、羽咋市歴史民俗資料館の収蔵庫で保存されている未公開資料をデジタル化し、画像や動画、3Dモデルなどのデジタルデータをさまざまな方法で公開し、地域学習などに活用してもらうことを目的としています。また、さまざまな理由で寺社や史跡などの文化財を訪れることが難しい方々にも、デジタルの手法を介して身近に感じてもらうために作成しました。

サイト内では、古いフィルム写真やビデオテープをデジタル化してアーカイブし、これを視聴・閲覧できるようにしているほか、360度カメラによる妙成寺境内や史跡公園のVR動画も公開し、PCやスマホで手軽に文化財のバーチャル散策が体験できるようになっています。なかでも人気コンテンツは、3Dモデルデータの公開で、とくに閲覧回数が多いのは、やはり妙成寺五重塔の3Dモデルデータです。

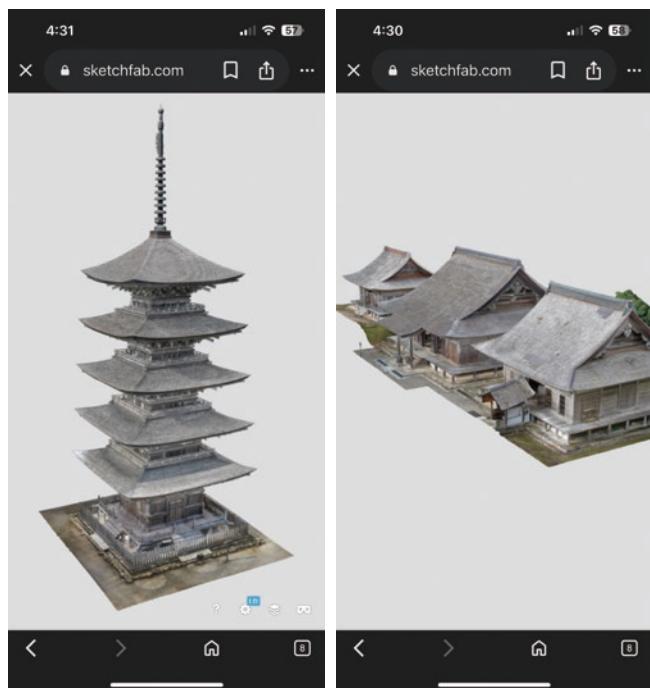


羽咋市デジタル博物館「デジハクイ」

3Dモデルは、利用者の自由な視点で拡大や回転ができるため、通常は見ることができない五重塔の先端部分の相輪や水煙の造形、五層目の屋根の重なり、複雑な組物の構造などを、まさに手に取るように観察することができます。自分のスマホのなかに「3Dの五重塔」が現れるという不思議な体験は、小中学生の郷土学習をはじめ多くの利用者に楽しんでもらっています。

このほかにも、本堂・祖師堂・三光堂を連結した「三堂並置」の3Dモデルデータも公開しています。このデータの公開により、先述した地形の起伏を克服した建物配置の設計を、文字どおり3次元的かつ直感的に、現地に行かなくても伝えることができるようになりました。この試みは、一般の利用者だけではなく、研究者からも好評をいただいているです。

さらに、これらの3Dデータは、AR（拡張現実）やVR（仮想現実）での活用も可能です。例えば、スマホやタブレットをかざして、五重塔を教室の机に表示させて観察しながら学習したり、VRゴーグルを使って眼前に等身大の五重塔を表示させ、その大きさや意匠を没入感をもって体感することも可能になります。こうしたデジタルならではの新しい文化財体験が、実際の文化財への好奇心を引き出し、現地を訪れ「実物をみてみたい」という「デジタルからリアルへ」の見学行動に結びつくことを期待しています。



建造物の3Dモデル (Sketchfabにて公開)

5. 文化財の価値を最大化するために

羽咋市では、妙成寺の「国宝指定」という大きな目標を掲げていますが、それがゴールとは考えていません。文化財を未来に残し、確実に次世代へ手渡していく「文化財保護」の仕組みづくりを実現することが、達成すべき最終的なゴールです。

そのためには、従来のアナログ的な調査手法をふまえながら、新しいデジタル技術も活用した「文化財DX」も意識する必要があると考えています。新しい調査研究技術やデジタル保存・公開の手法も生かし、妙成寺の文化財の価値を可能な限り引き出して最大化する。それを調査・保存・活用のサイクルのなかで市民に伝え、共有し、共に守っていく。そのような取り組みを、これからも一歩ずつ進めていきたいと考えています。

ぜひ一度、「羽咋市デジタル博物館」を訪れてみてください。そして、リアルの羽咋市歴史民俗資料館や妙成寺などの文化財を訪れてほしいと思います。実物だからこそ伝えられる文化財の価値と能登の歴史に触れていただければ幸いです。

＜ご案内＞

「羽咋市デジタル博物館」では、今回ご紹介した3Dモデルのほかにも、地域の歴史を物語るたくさんの画像、動画などのデジタルアーカイブを公開しています。皆さまの訪問をお待ちしています。

デジタル博物館
羽咋市デジタル博物館
HAKUI CITY DIGITAL MUSEUM



参考資料・URL

羽咋市デジタル博物館

<https://www.city.hakui.lg.jp/digitalmuseum/index.html>

日蓮宗本山金峯山妙成寺『妙成寺文化財総合調査報告書』

2020 妙成寺編集委員会 (株)ショセキ

令和7年度 倫理・法令に関する講習会 デジタル技術活用時の法律上の留意点 —AIを中心に—

〈総務部会 倫理・法令委員会〉

1. はじめに

総務部会では、これまで独占禁止法を含むコンプライアンスやワークライフバランスを踏まえた働き方改革、職場におけるハラスメント等のテーマ講習を開催してきた。今年度は昨今話題になっているAIなどデジタル技術の活用において課題となる事項に焦点を当て、「デジタル技術活用時の法律上の留意点」と題して講習会を企画・開催したものである。

2. 開催方法

日 時：令和7年10月17日

開催方法：現地・オンライン併用方式

参加人数：申込者135名（オンライン100名）

講 師：新潟大学 法学部

助教 須川 賢洋 氏



3. 講習内容

（1）AI利用時の注意点

AIといつても様々なものがあり一括りにすることはできない。メーカーや種類毎に約款が異なり、入力された情報の扱いや守秘などは特に注意が必要である。AI開発の注意点として教師データの選定や学習方法（ディープラーニング、敵対的学习）に留意すること、プロンプト入力に際しては機密情報やプライバシー情報、バイアスが掛かる情報を安易に入力しないことが求められる。またAIを活用しアウトプットされた成果物を使う時の注意点として著作権等の知的財産の侵害にあたらないか、名誉棄損や営

業妨害など第三者に損害を与えないかといった点に注意する必要がある。

（2）生成AIと権利関係

AI技術の活用において最も関わる課題が著作権など権利関係に係る事項であり、その概要を理解しておく必要がある。

（2）-1 著作権

著作物における著作権の保護対象となるのは「思想又は感情を創作的に表現したもの」であり、「事実」や「数値」などは保護の対象とはならない。また「アイデア」も対象とはならない。反面、特許などの工業所有権はアイデア的側面を保護している。どこまでがアイデアでどこまでが表現かといった議論が生ずることがあるが、マージ理論（結合理論）によるとアイデアと表現が分離できない場合は著作権の保護が与えられないこととなる。

また、ただのファクトデータの集まりであるビッグデータは著作権法上のデータベースとはならないことから著作権法では保護はできず、不正競争防止法で保護することとなる。

（2）-2 不正競争防止法

平成30年の法改正においては、ビッグデータの保護という観点から「限定提供データ」という概念を新設し保護対象となった。「限定提供データ」とは、「業として特定の者に提供する情報として電磁的方法により相当量蓄積され、及び管理されている技術上又は営業上の情報」のことである。令和5年の法改正においては営業秘密・限定提供データの保護の強化（限定提供データの範囲の修正）、デジタル空間における模倣行為（商品形態の模倣）の禁止等が新たに定められた。

（2）-3 著作権法30条の4とAIとの関連

平成30年の著作権法の一部を改正する法律では、法30条の4において「著作物は、次に掲げる場合そ

の他の当該著作物に表現された思想又は感情を自ら享受し又は他人に享受させることを目的としない場合には、その必要と認められる限度において、いずれの方法によるかを問わず、利用することができる。」とあり、その対象として「二 情報解析（多数の著作物その他の大量の情報から、当該情報を構成する言語、音、映像その他の要素に係る情報を抽出し、比較、分類その他の解析を行うことをいう。…（略）…）の用に供する場合」が定められており、ディープラーニングの教師データなどがこれに該当するものとされている。ビッグデータ振興やセキュリティ確保を目的に、時代が求める新たなニーズに対する柔軟な権利制限規定を定めたものである。なお、これらの利用においては著作権者の利益を不当に害さないことが前提となる。

（2）-4 AI時代の著作権問題

著作権侵害の判断は通常は依拠性と類似性をもって判断される。文化庁においては令和6年3月15日に「AIと著作権に関する考え方について」をまとめしており、その中で議論や学説をとりまとめている。AI利用においてはこれらの内容も踏まえ見識を深めていくことが重要になると考えられる。

（3）AIやデジタル技術をめぐる国の動向

（3）-1 日本版AI（振興）法

令和7年5月28日に「人工知能関連技術の研究開発及び活用の推進に関する法律（AI法）」が成立、同年9月1日に全面施行された。AIのイノベーションを促進しつつ、リスクに対応するため既存の刑法や個別の業法等に加え、新たな法律として制定されたものであり、AIの活用における基本理念、政府が実施すべき施策の基本的な方針や基本的施策について定めている。9月12日には第1回AI戦略本部の会合が開催され、翌日13日にはAI基本計画の骨子（たたき台）が公表された。AI基本計画の本文は今冬を目途に作成されとりまとめられる予定である。

（3）-2 サイバー対処能力強化法及び同整備法

令和7年5月16日に「サイバー対処能力強化法及び同整備法」が成立、同年5月23日に公布された。「重要電子計算機に対する不正な行為による被害の防止に関する法律（サイバー対処能力強化法）」と「重要電子計算機に対する不正な行為による被害の防止に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する

法律（サイバー対処能力強化法整備法）からなるものであり、基幹インフラ事業者のシステムをサイバー攻撃から守るため、基幹インフラ事業者によるインシデント報告等や情報共有・対策のための協議会の設置といった官民連携の取り組み、通信情報の利用、アクセス・無害化措置の実施を行う。国においてはサイバーセキュリティ戦略本部の改組、機能強化、内閣サイバー官の新設を行い、その取り組みを推進する。

（4）最後に

デジタル技術の活用にあたり、インシデントが起きた時のためにデジタル・フォレンジック（証跡・ログの解析）が可能なシステムを設計することは有効である。リスク回避にあたってはクライアントやインフラ事業者、ネットワーク事業者との間で担当職掌のすみ分けを行い、責任分解点の明確化を図ることが重要であると考える。

4. おわりに

令和6年元旦の能登半島地震に加えて同9月の豪雨災害により多くの方々が被害に見舞われました。被災された皆さんに心よりお見舞い申し上げます。

今回の講習会では会場参加並びにオンライン参加を合わせて100名以上の方々にご参加いただきました。今もなお災害対応にご尽力されている会員企業の皆様に心から敬意を表しますとともに、そのような中にあって多くの方々にご参加いただいたことに感謝申し上げます。

最後に、ご多忙にもかかわらず講師をお引き受け頂いた新潟大学法学部助教 須川賢洋様に心より感謝申し上げます。

以上



講習会場の様子

新潟県立 新潟工業高等学校 出前講座

～道路事業における建設コンサルタントの仕事 ／国道7号栗ノ木・紫竹山道路の見学～

〈技術部会 道路委員会〉

1. はじめに

技術部会道路委員会が平成26年度から企画・運営を担当し、今回（令和7年度）で10回目を迎えた新潟県立新潟工業高等学校（以下、新潟工業高校という）での出前講座の実施結果について報告する。

出前講座は、「北陸建設界の担い手確保・育成」の取組みとして、新潟工業高校都市工学科2年生を対象に実施している。従来は、2年生の科目であった道路設計演習に役立てることを目指し、道路構造の基本事項や設計事例を主体とした座学を行うとともに、設計に基づき施工されている現場を見学する構成で授業を行っていた。

今回は、令和6年度の学科改編に伴う科目の変更を踏まえ、進路指導の一環として建設コンサルタントの役割や道路事業に関わる仕事の概要を午前の座学で説明することとした。

現場見学は、昨年度に続き北陸地方整備局新潟国道事務所のご協力のもと、新潟市中央区において事業中の国道7号栗ノ木道路・紫竹山道路の工事見学を中心実施した。

2. 令和7年度出前講座の概要

午前の3限に座学、午後の4～6限を現場見学として下記のスケジュールにより授業を行った。

- ・日時：令和7年11月20日(木) 10:55～14:30
10:55～11:45 座学(北陸インフラづくりの提言、
道路工事が始まるまでの仕事)
11:45～12:30 昼休み
12:30～13:00 見学場所へ移動
13:00～13:20 ①新潟国道事務所で工事概要の説明
13:20～14:30 ②新潟維持出張所屋上で工事説明
③新潟除雪基地の見学
④栗ノ木高架橋下部工事の見学
14:30 見学終了、学校へ移動
- ・参加者：新潟工業高等学校 都市工学科2年生
32名（欠席8名）

3. 道路委員による座学

(1) 『北陸インフラづくりの提言』紹介

初めに、建設コンサルタント協会のPRを兼ね、北陸支部が令和6年度に作成した『北陸インフラづくりの提言』の動画を上映した。

この提言は、北陸の地域づくりに貢献する技術者集団として、おおむね『30年先』の将来を見据え、地域課題の改善・解決に向けた構想（考え方と具体策）を提案するものである。卒業後に建設界の担い手となり得る都市工学科の生徒たちが、建設コンサルタントの魅力、やりがいを感じ取っていれば幸いである。



写真1 『北陸インフラづくりの提言』動画の視聴

(2) 道路工事が始まるまでの仕事

過去の出前講座で実施したアンケートでは、現場作業が主体で仕事の内容が分かりやすい工事や測量を志望する生徒が多い反面、デスクワーク主体のコンサルタントの仕事は十分に理解されていないように感じられた。そこで、工事に着手する前にコンサルタントがどのような仕事をして、インフラ整備に深く・長く関わっているか道路事業を例に説明することとした。

- ・建設コンサルタントは事業の上流（企画段階）から下流（維持管理段階）までを担う重要な業種であり、その成果がインフラの機能やコストに大きく影響する。
- ・道路をつくるためには、工事の数年～数十年前から調査を開始し、調査・計画・事業化・設計（概略・予備・詳細）等の各段階で建設コンサルタントに業務が委託される。

- ・道路は、整備の目的と効果、自然条件、土地利用などに配慮しつつ、技術基準を満足するように設計する。工事は、コンサルタントが作る設計図に基づき施工される。
- ・最近では、3次元地形データを用いて道路などの土木構造物を立体的に設計するCIMが一般化している。授業では、河川に近い地域におけるルート検討のデモを行い、河川の水位上昇時に水没しないルートを短時間で計画し、3次元で確認できることを紹介した。



3. 栗ノ木・紫竹山道路の現場見学

国道7号栗ノ木道路および紫竹山道路では、栗ノ木バイパスの立体化工事が進められており、令和7年11月時点で全84基ある橋梁下部工のうち54基が完成または工事中である。栗ノ木高架橋（仮称）の上部工についても、令和7年度から架設工事が予定されている。

(1) 新潟国道事務所での事業概要説明 [位置図①]

新潟国道事務所1階の展示スペースにて、調査課のご担当から栗ノ木・紫竹山道路を含む万代島ルート線の計画についてご説明頂いた。

- ・万代島ルート線は、萬代橋など新潟市中心市街地における国道7号の渋滞緩和やまちづくり支援等を目的として計画され、30年以上前の平成4年に都市計画決定された。
- ・平成14年に開通している柳都大橋も万代島ルート線の一部であり、開通後は萬代橋の渋滞が解消され、大きな効果があった。
- ・現在は、栗ノ木道路と紫竹山道路の工事を進めているが、柳都大橋までつながる沼垂道路も令和4年度に事業化されており、完成後には紫竹山ICから柳都大橋の間が立体化され、ノンストップで通行可能になる。
- ・このような大規模な道路事業は長い時間がかかるが、完成までの8割程度の期間は建設コンサルタントが関わっており、行政からみても重要な存在である。



説明後には、展示されているパネルや完成予想模型を見学した。



(2) 新潟維持出張所での工事概要説明 [位置図②]

新潟維持出張所の屋上にて、新潟国道事務所の主任監督員より工事全体の概要についてご説明頂いた。

- ・栗ノ木道路、紫竹山道路の完成形は、全長約1km、4車線の栗ノ木高架橋（仮称）ができ、現在は平面交差となっている紫竹山ICの亀田バイパスから新潟バイパス新発田方面も立体化される。
- ・令和7年度は、橋脚13基と紫竹山交差点周辺の道路改良工事を施工中である。

- ・高架橋の上部工は、工場製作中で、今年度中に現場での架設工事を始める予定である。
- ・現在は橋梁工事が進んでいるが、それまでには栗ノ木川の付替え、国道7号の切り回し、紫竹山交差点の盤下げなど多くの工事が必要であった。



写真4 新潟維持出張所屋上からの見学

(3) 新潟除雪基地の見学 [位置図③]

新潟国道事務所防災情報課のご担当の案内により、除雪基地の見学を行った。車庫には最新型を含む除雪車が並び、用途に応じて機種が違うことや、交差点でのサイドシャッターの役割などをご説明頂いた。

説明後は、多くの生徒が除雪車の運転席に座り、高さと大きさを実感していた。



写真5 除雪車の見学、体験搭乗

(4) 栗ノ木高架橋(仮称)橋脚工事 [位置図④]

栗ノ木高架橋下部(上り・P28-29)工事の受注者である(株)廣瀬のご担当より、橋脚工事の説明を受けた。

- ・工事対象の橋脚は、供用中の国道7号に近接しており、橋脚梁部の施工スペースが狭く、安全性に課題がある。
- ・道路に近接する作業を減らすため、この工事では梁部の鉄筋を地上で組み立ててプレハブ化し、一括して架設する方法を採用している。

- ・プレハブ化にあたっては、鉄筋の3次元モデルを作成し、架設時に干渉しないように組み立てている。



写真6 地上で組み立てたプレハブ鉄筋の見学

説明後、橋脚周囲の足場に上らせてもらい、橋脚柱の配筋状況を間近で見ることができた。



写真7 足場から橋脚内部を見学

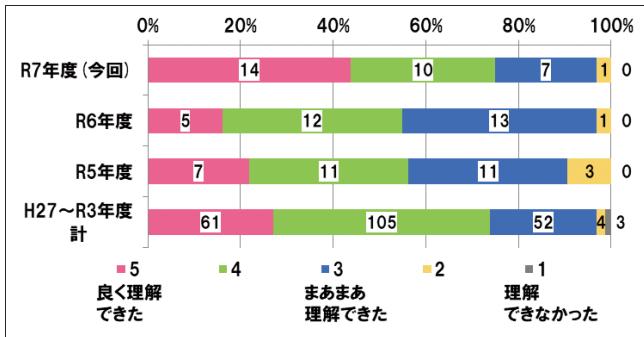
4. 生徒へのアンケート結果

出前講座の有効性の把握と、今後の取り組みの参考とするため、平成27年度から講座終了後にアンケート調査を行っている。

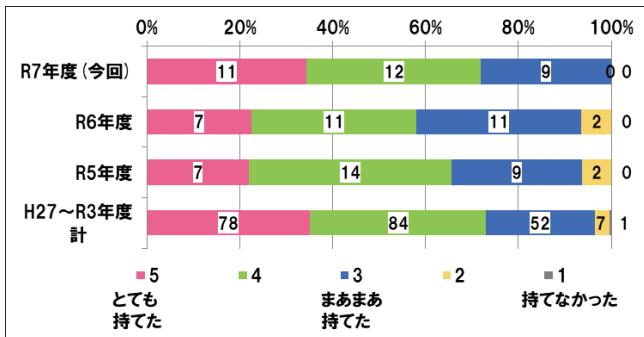
授業の理解度【問1】、道路計画・設計への興味・関心【問2】、コンサルタント業務の理解度【問4】は、いずれも過去2回に比べ高評価を得られた。今回から座学の内容を変えたことや、『北陸インフラづくりの提言』の動画が生徒にとって分かりやすかったのかもしれない。

卒業後の進路に関する【問5、問6】は、8割以上が土木関係の業種への就職に前向きであるが、過年度に比べ割合がやや低下した。志望職種は工事が半数を占め、次いで測量が2割弱であった。コンサルタント業務への理解度は高かったが、残念ながら「一番やりたい仕事」に選ぶ生徒は約1割にとどまった。

【問1】本日の授業で、道路の計画・設計の流れを理解できましたか。[R6まで: 道路計画の考え方や道路構造を理解できましたか。] (5段階評価)



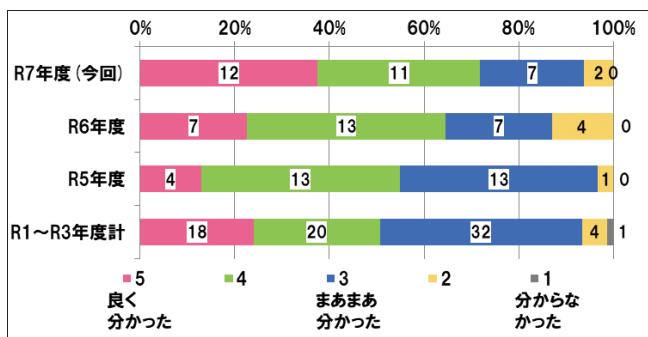
【問2】本日の授業で、道路の計画・設計に興味・関心を持てましたか。[R6まで: 道路設計に興味・関心を持てましたか。] (5段階評価)



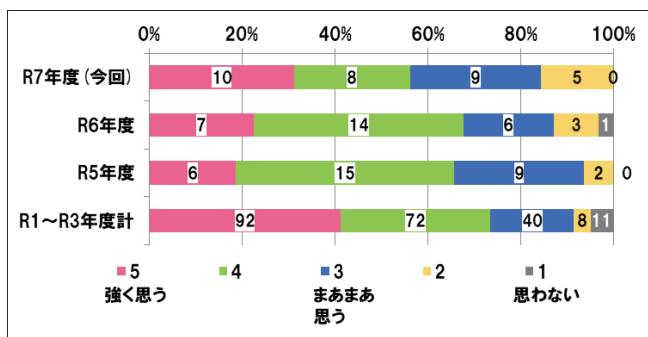
【問3】本日の授業全体を通して感想をお書き下さい。
(主な意見を抜粋)

- ・これだけ大きい作業をした中で、完成したときの達成感が凄いと思いました。
- ・道路をつくるため、昭和の頃から計画が進められていたことに驚きました。
- ・とても大変なことをやっていると感じました。作るだけではなく、準備が大切だと感じました。
- ・なかなか現場を見ることが無かったので、良い経験になりました。工事が終わった後の効果まで、よく考えられていると感じました。
- ・今回の出前授業で、道路の計画・設計の流れについて現場を通じて学ぶことができて良かったです。また、除雪車に沢山の種類があり、試乗して体験することができて楽しかったです。
- ・出前授業や現場見学を通して、道路工事が始まるまでの手順や、工事の手順などが理解できました。今、何の作業をしていて、それが何になるのかも分かり、色々知ることができて楽しかったです。

【問4】コンサルタントの仕事の内容や範囲が分かりましたか。(5段階評価)



【問5】土木に関係する職業に就職したいと思いますか。
(5段階評価)



【問6】土木関係の職業に就職したい理由は何ですか。
(主な意見を抜粋)

- ・親が土木関係の仕事に就いているためです。(複数回答あり)
- ・小さな頃から鉄道が好きで、それに関わる仕事がしたいからです。
- ・道路ができたときの達成感を味わってみたいからです。
- ・みんなにとって必要不可欠なもので、それを作ることはやりがいのある仕事だからです。

5. おわりに

今年度の講座は、科目変更を考慮した内容に改めた効果があったのか、アンケート結果を見る限り全般的に理解度が高まったと考えられる。一方、50分の座学に多くの話題を入れたことで、慌ただしい進行となつた面もあるため、次年度の開催に向けては、適度にテーマを絞るなどの改善を図っていきたい。

最後に、本講座の開催にあたり、多忙な時期にも関わらず資料作成、説明にご協力を頂いた新潟国道事務所様、工事受注者様ならびに新潟工業高校の先生方に心より御礼申し上げます。

お知らせ

令和7年度 道路トンネル現場見学会 利賀ダム工事の現場見学

〈技術部会 道路委員会・トンネル委員会〉

1. はじめに

富山県南砺市で建設中の利賀ダムにおいて、道路委員会・トンネル委員会共催の現場見学会を開催しました。当日は天候に恵まれ、見学会には26名、見学後の交流会は23名が参加しました。

■日時 令和7年11月6日(木) 13:00~16:30

■見学行程

11:45 新高岡駅集合

13:35~14:00 ダムサイト展望台(地盤変動域)

14:20~14:45 ダムサイト左岸(赤松谷)

14:55~15:05 河床桟橋

15:25~15:35 利賀ダムDXルーム

17:15 新高岡駅解散

18:00~20:00 参加者交流会

2. 利賀ダム建設事業の概要

利賀ダムは、庄川の右支川である利賀川において、河口から約40km、庄川合流点より約8kmの位置で建設が進められている重力式コンクリートダムです。ダムの目的は、①最大500m³/sの貯留による洪水調節、②流水の正常な機能の維持、③1日最大8,640m³の工業用水の取水の3つとされています。

平成5年度の事業化後、平成11年度から工事用道路に着手、令和6年にはダム本体工事に着手されました。



図1 利賀ダム位置図(地理院地図)

■ダム諸元

- ・湛水面積 : 1.1km²
- ・設計洪水流量 : 1,630m³/s
- ・堤頂標高 : EL. 439.0m
- ・堤 高 : 112.0m
- ・堤 頂 長 : 255.0m
- ・堤体積 : 約50万m³

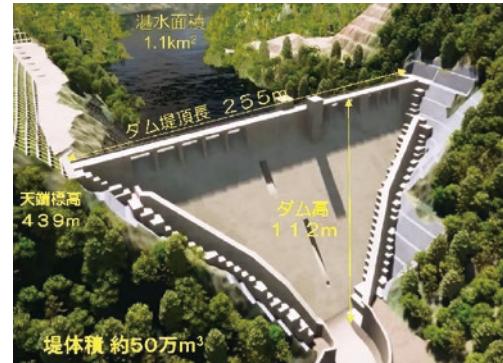


図2 ダム完成イメージ(出典:令和7年度利賀ダム事業概要)

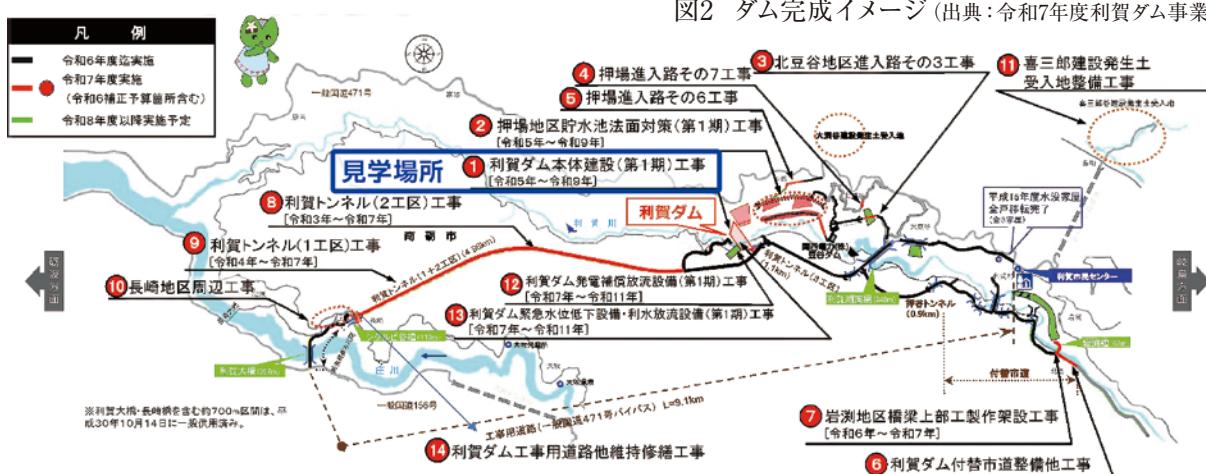


図3 令和7年度工事箇所(出典:令和7年度利賀ダム事業概要)

3. 利賀ダム建設工事現場見学

今回は、利賀ダム工事事務所の河村副所長のご案内により、利賀ダム本体建設(第1期)工事にて施工中のダム本体基礎掘削および右岸地盤変動域の斜面対策を見学しました。

■ダムサイト展望台(地盤変動域)

ダムサイト右岸の展望台にて、利賀ダムの事業概要、ダム本体および斜面対策工事の説明を受けました。利賀ダムでは掘削残土をダム本体コンクリートの骨材に転用する計画であり、重ダンプトラックによる土砂運搬や貯水池上流側に建設中の骨材プラントを見ることができました。



ダムサイト展望台での説明



重ダンプトラックによる土砂運搬

■ダムサイト左岸 (赤松谷)

ダムサイト右岸側の掘削、左岸側の仮設備、ダム基礎部での土砂搬出状況を見学しました。

右岸地盤変動域の排土工(高さ約150m)の下方で施工中の本体掘削は、1日2回の発破で岩盤を破碎後、100m近い斜面下の積込みヤードに振り落とす豪快な作業でした。現場は急崖斜面のため、掘削当初はヘリコプターで機材を運搬したそうです。

今後、ダム左岸には管理棟が設置され、完成後には観光客など一般車両の立入りも想定されていますが、近接するトンネル坑口間での出入り方法や赤松谷からの雪崩対策等に課題があるとのことです。



ダム右岸側の掘削状況

■河床栈橋

一般道では採用し難い縦断勾配12%の河床進入トンネルを通って河床栈橋に向かい、本体掘削土の積込みや転流工を見学しました。転流工トンネルの上流側は、土砂堆積等の不測の事態に備え、ダンプトラックが通行可能な断面が確保されています。

また、冬期休工後には積雪が氷のように固まり、雪塊の撤去に苦労しているので、建設コンサルタントから対応策を提案してほしいとのことです。



河床進入トンネル

4. おわりに

利賀ダムでの道路トンネル見学会は平成27年度以来、10年ぶりでしたが、ダム本体着工など着実な進捗を感じることができ、初めて見学した参加者からも「また見学したい」との感想を頂きました。経年的に見学できる大規模事業や現場が減りつつありますが、知見を広げ、技術者(特に若手)の交流を深める場として、次年度以降も見学会を企画しますので、奮ってご参加いただければ幸いです。

終わりに、今回の見学でご説明を賜りました河村副所長ならびに工事関係者各位に、厚く御礼申し上げます。



利賀ダムDXルームでの集合写真

令和7年度 橋梁現場見学会 金沢外環状道路 千田高架橋 上部工工事

〈技術部会 橋梁委員会〉

1. はじめに

令和7年8月26日（火）、建設コンサルタンツ協会北陸支部橋梁委員会による現場見学会が開催されました。今回の見学会は、石川県金沢市で整備が進められている金沢外環状道路（海側幹線）の一部である「大浦千木町線千田高架橋新設工事（海側上部工）」を対象として行われました。

2. 見学会の工程

参加者は金沢市千田町内の現場事務所駐車場へ集合しました。見学会は13時より開始され、以下のスケジュールに沿って進行しました。

現地集合

- ・橋梁概要の説明…………… 13:00～13:10
- ・工事詳細の説明…………… 13:10～13:30
- ・現場見学…………… 13:30～14:15
- ・補足説明・質疑応答・全体総括… 14:15～14:30

現地解散

3. 千田高架橋工事の概要

（1）事業の背景と道路規格

金沢外環状道路（海側幹線）は、金沢都市圏の渋滞緩和や物流の効率化を支える重要な幹線道路です。本工事の対象となる千田高架橋は金沢市千田町から木越町地内に位置し、第3種第2級、設計速度V=60km/hの規格で整備されています。工事は株式会社北都鉄工が担当しています。



図1 金沢外環状道路位置図

（2）橋梁構造の特徴

千田高架橋の諸元は下記のとおりです。

	A1-P3径間	P3-A2径間
橋種	3径間連続 鋼少主桁橋	4径間連続 鋼少主桁橋
橋長	107.000m	183.000m
桁長	106.800m	182.800m
幅員	全幅9.890m、幅員9.000m	

少数主桁橋を採用することで、構造の合理化とメンテナンス性の向上が図られており、床版には耐久性に優れた鋼コンクリート合成床版（厚さ200mm）が用いられています。主桁の防食は溶融亜鉛めっきが施されています。道路橋示方書・同解説（平成24年3月）による設計であり、設計荷重はB活荷重、設計水平震度はKh=0.30（Ⅲ種地盤）が適用されています。

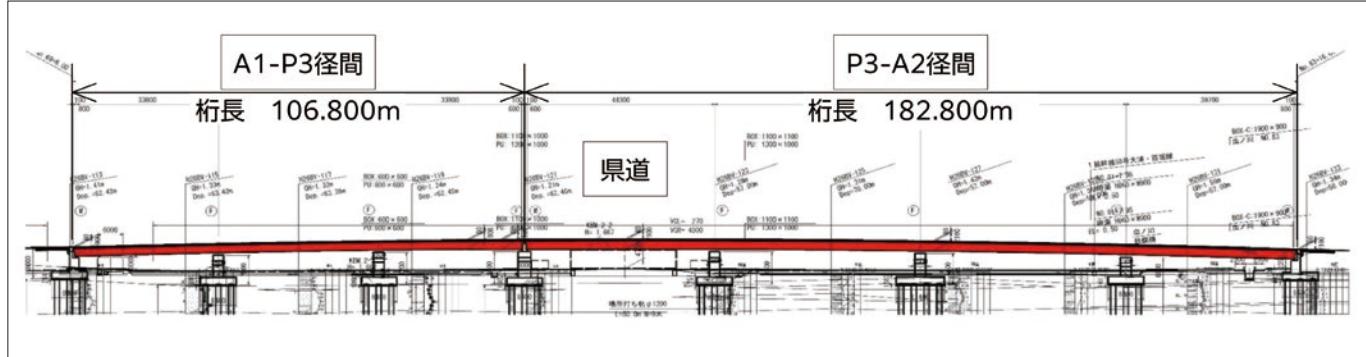


図2 千田高架橋 橋梁一般図（側面図）

(3) 全体工事の流れや安全対策

令和7年8月下旬時点では、支承工～ペント設備工～架設工～本締め工～現場塗装工を終え、合成床版工に着手している状況です。合成床版工はA1-P3径間は既にコンクリート打設を終え、P3-A2径間の床版鉄筋工が終盤をむかえつつあります。

当該工事では、幹線道路上での施工に伴う安全対策や、周辺住居への騒音・振動に配慮した環境対策が提案されています。特に県道向栗崎安江町線での架設では、夜間通行止めを実施するなど、交通への影響を最小限に抑える工夫がなされています。

4. 現場見学の状況

令和7年の夏も猛暑日が多い傾向で、当日は一時的に不安定な天気となる予報ではありました。夏らしい青空のもとで29名が現場見学に参加しました。参加者は熱中症対策の水分を持参したり、空調服を着用したりと各自で熱中症対策を取りながら熱心に説明を聞いていました。

(1) 橋梁概要及び工事詳細の説明

工事事務所の前で、橋梁概要及び工事詳細について北都鉄工より説明を受けました。(写真1)



写真1 橋梁概要及び工事詳細説明状況

本橋の桁架設は25ステップとなっており、ステップ1～24には60t吊ラフテーンクレーンや100t吊オールテーンクレーンを用いたペント架設工法が採用されています。最終のステップ25の県道交差部は夜間通行止めによる360t吊オールテーンクレーンを用いた架設です。

(2) 現場見学

現場見学は、A1-P3径間のコンクリート打設後の床版上面へ上がり、P3-A2径間の床版鉄筋工やコンクリート高欄の鉄筋工及び型枠工などの状況が確認できました。(写真2)



写真2 P3-A2径間の床版鉄筋工の状況

少数主桁橋の特性を活かした鋼合成床版の施工状況は、本見学会の大きな見所の一つでした。従来のRC床版と比較して、現場での型枠工を削減できる合理的な施工プロセスや、主桁と床版を一体化させる合成構造の細部について、現場担当者より具体的な解説が行われました。

(3) 全体工事の流れや安全対策

別会場へ移動し、補足説明や質疑応答が行われました。(写真3)



写真3 別会場での質疑応答状況

質疑応答では、大きな鋼部材の溶融亜鉛めっき施工の難しさなどについて施工者から紹介があり、設計での配慮が必要な内容を知ることができました。

昨年度と同様、今年度の現場見学会も若手技術者に多く参加してもらい現場担当と活発に意見交換していたことが印象的でした。現場を見る機会が少ない設計者にとっては、とても貴重な時間となりました。

5. おわりに

今回の見学会は、設計図面だけでは理解しにくい施工の実態を学ぶ、非常に有意義な現場見学会となりました。完成後の橋を車で通行するのが楽しみとなりました。実施にあたり、ご多忙の中ご協力を賜りました関係者各位に心より感謝申し上げます。

令和7年度 まちづくりセミナー研修 (石川県能登地域 他)

〈技術部会 都市計画委員会〉

1. はじめに

令和6年1月に発生した「令和6年能登半島地震」や同年9月に発生した「令和6年奥能登豪雨」により甚大な被害を受けた能登地域では、単に被災前の姿に復元するのではなく、未来志向に立って以前よりも良い状態へと持っていく「創造的復興」に向けたまちづくりが進められている。

技術部会都市計画委員会では、これまでにも「防災・減災まちづくり」をテーマとしたセミナー研修等を開催してきたが、今年度はこれまで得られた知見等を踏まえつつ、今後の事前防災・復興まちづくりについて学ぶことを目的に、現在まさに復旧・復興に向けたまちづくりを進めている能登地域の取組をテーマとしたセミナー研修を開催した。なお、本セミナー研修は2日間の開催とし、1日目に被災地の現地視察や見学を行った後に、2日目に参加者による意見交換会をワークショップ形式で行うプロセスとすることで、視察等で得た情報や気づきを参加者同士で共有するほか、意見交換による知識の定着や学びの深化を図っている。

■開催概要

[開催日]令和7年11月6日(木)～7日(金)

[対象地]能登地域(七尾市、穴水町、輪島市等)

[参加者]17名

■プログラム

[1日目]令和7年11月6日(木)

- ①現地視察：七尾市内の被災・復旧状況
- ②見学・講演：のと鉄道 震災語り部観光列車
- ③現地視察：穴水町内の被災・復旧状況
- ④現地視察：輪島市内の被災・復旧状況

[2日目]令和7年11月7日(金)

- ①参加者による意見交換会：

【テーマ】創造的復興にむけた今後のまちづくり
の視点について

2. 現地視察・見学 [1日目]

①現地視察：七尾市内の被災・復旧状況

七尾市内では、七尾マリンパークの護岸や広場の復旧状況、市街地内の商店街における仮設店舗などについて現地視察を行った。奥能登地域と比較すると被害が少なかったと考えられる七尾市内においても、未だ復旧・復興の途中であることを実感できる視察となつた。



七尾マリンパークの復旧工事状況

②見学・講演：のと鉄道 震災語り部観光列車

「のと鉄道 震災語り部観光列車」は、震災の記憶を風化させず、災害の教訓を後世に伝えるために、のと鉄道株式会社が運行している企画列車で、地震発生時に運行していた「のと里山里海号」の車両内で、七尾駅から穴水駅までの運行中に語り部の乗務員から当時の状況や地震の体験などについて解説をいただいた。地震発生からの緊迫した避難状況について説明を受けたほか、大津波警報の発令により乗員乗客が実際に避難した高台を車窓から見学した。



震災語り部観光列車での語り部の説明

[解説いただいた主な内容]

- ・車両には乗員乗客合せて48名が乗車しており、地震発生時は、能登中島駅に停車中であった。
- ・16時06分頃、スマートフォンから地震アラートが鳴り、強い揺れ（最大震度5強）が襲った。

- ・16時10分頃、再び地震アラートが鳴り、さらに強い揺れ（最大震度7）が発生し、この時は立っていられないほどであった。
- ・16時22分頃、防災無線のスピーカーから大津波警報のアナウンスがあり、駅前の丘の上にある閉校となった旧中島高校へと避難し、体育館で地元住民の方を含む約300名で一夜を過ごした。

③現地視察：穴水町内の被災・復旧状況

穴水町内では、バス車内から市街地内の現状について現地視察を行った。穴水町では町役場や総合病院が災害ハザードエリア内に立地又は近接しているほか、復興公営住宅の整備地区が市街地中心部から比較的離れているため、復旧・復興に向けたまちづくりに對して様々な課題を確認できる視察となった。

④現地視察：輪島市内の被災・復旧状況

輪島市内では、大規模火災が発生した朝市通りを中心としたエリアについて現地視察を行った。当該エリアでは地震により発生した火災により、約4万9千m²



輪島市朝市通り

が焼失し、震災直後はがれきの山となっていた。その後に建物等の解体が進んだため、現在では一部で焼け残った道路照明などが存在しているものの、周辺はほぼ更地となっていた。他方、更地となつたことで、かつて能登地域でも有数の観光地であった面影も喪失され、今後は現在検討が進められている「輪島市朝市周辺再生プロジェクト」等による復興まちづくりの必要性を感じる視察となった。



建物解体が進み更地となつた朝市通りエリア

3. 参加者による意見交換会 [2日目]

参加者による意見交換は、1日目に現地視察を行った穴水町を対象とし、参加者を3つのグループに分けてワークショップ



意見交換会の様子

形式で実施した。意見交換に先立ち、都市計画委員より、同町における震災復興計画の現状や課題等について説明を行った後、同町における今後の復興まちづくりの在り方などについてグループ内でディスカッションを行い、最後に各グループから発表を行った。各グループでは、都市機能の集約や地域公共交通の形成など、様々な視点で活発な議論が行われ、復興まちづくりに対する知見を深める有意義な時間になった。また、参加者には若手技術者も多かったため、グループ内の他社の技術者と対話することによって、多くの学びが得られる良い経験になったものと考えられる。

[ディスカッションの主な内容]

- ・防災機能の向上に向けて、平時と有事の使い分けも踏まえつつ、道の駅への機能集約などを推進
- ・自動運転等の新しいモビリティの活用も踏まえ、復興公営住宅の整備地区と市街地中心部を接続する交通ネットワーク形成を推進
- ・仮設商店街の利活用等により若者が集える場所を創出することで中心市街地の活性化を促進

4. おわりに

本セミナー研修開催にあたり、多忙な中、準備、案内、説明などに協力して頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。



震災語り部観光列車前での参加者による集合写真

1. はじめに

令和6年能登半島地震により甚大な被害を受けた石川県能登半島は、国の特別天然記念物であるトキの本州最後の生息地として知られている。現在、トキを「生物多様性」および「里山里海」の保全の象徴と位置づけ、その定着に向けた生息環境の整備や、共生を支える社会環境の構築が進められており、令和8年には、復興のシンボルとして能登地域にてトキが放鳥される予定である。

今回、建設コンサルタントとして、震災復興と環境保全の両立にどのように貢献できるかを考えるため、令和7年10月30日（木）、31日（金）の2日間にわたり、技術セミナーを実施した。本セミナーでは、トキをはじめとする希少な野生動物が生息可能な自然環境の保全と、生物多様性の重要性について理解を深めた。

2. 技術セミナーの概要

○現地見学会

- 1) 場所：石川県七尾市高階地区、羽咋市南潟地区
- 2) 日時：令和7年10月30日（木）12:00～17:00
- 3) 参加：19人
- 4) 内容：トキ放鳥モデル地区の取組見学

○ワークショップ

- 1) 場所：石川県女性センター3階
- 2) 日時：令和7年10月31日（金）9:30～12:30
- 3) 参加：19人
- 4) 内容：
 - ・講演①「トキの野生復帰と能登の創造的復興：佐渡島での経験をもとに」
 - ・講演②「トキを軸とした能登地方の包括的再生：コウノトリの事例をもとに」
 - ・グループディスカッション

3. 現地見学会の概要

(1) 石川県七尾市高階地区

高階地区は、トキの放鳥を見据えたモデル地区として生息環境の整備が進められており、水張水田の整備や化学肥料の5割削減など、環境配慮型農業への転換が行われている。

水田端部に「江」を設けることで、年間を通じて水が張られた環境を維持できるようになり、生物相の回復と多様化が進んでいる。

現地では、コウノトリが2年に1度飛来するなど、生態系の回復が進行していることが確認されているとのことであった。



【現地見学会の様子：高階地区】

(2) 石川県羽咋市南潟地区

南潟地区は、令和8年6月にトキの放鳥が予定されている地域であり、生息環境の整備が積極的に進められている。地区内には、江5か所、用水3か所などの水場が整備されている。従前は潟であったこともあり、フナやドジョウなどの水生生物が多く確認されている。

中干しが困難な湧水地では、湧水を活かしたビオトープ整備が進められ、生物の生息場所になるとともに、トキのエサ場として整備されている。さらに、個々の農家が田植えや収穫の時期をずらして営農することで、地域全体で多様な環境が形成されている。現地ではシラサギが飛来しており、多様な営農活動が結果的に自然の多様性を保つ好循環につながっている。



【現地見学会の様子:南潟地区】

4. ワークショップの概要

(1) 講演「トキの野生復帰と能登の創造的復興:佐渡島での経験をもとに」

石川県立大学生物資源環境学部准教授 上野祐介氏

佐渡島での成功事例を踏まえ、能登地域における「創造的復興」と「自然共生型地域づくり」の可能性、トキを媒介とした地域再生の展望について講演が行われた。

トキの定着は、単なる個々人のみならず、地域の人々の理解や農家、施工者など現場に関わる人々の理解と知識の共有が不可欠である。また、個別の農地管理ではなく、「農場全体としての生態系を管理する」という、俯瞰的な視点に立ち地域全体で取り組む必要がある。さらに、所有者不明の水田などの未利用地の利活用や、様々な環境の変化を取り入れることが生息環境の拡大に有効であり、転じてグリーンインフラの整備が重要である。



【講演会の様子:上野氏】

(2) 講演「トキを軸とした能登地方の包括的再生:コウノトリの事例をもとに」

金沢大学先端観光科学研究所教授 菊池直樹氏

トキやコウノトリといった希少鳥類を単なる生物保全の対象として扱うのではなく、「地域のシンボル」として定着させることが重要である。

豊岡市の事例として、コウノトリの野生復帰の初期段階では否定的な意見や懸念があったが、長期的な保護活動や地域参加型の取り組みを通じて、最終的には地域のシンボルとして定着した。

さらに、コウノトリの復帰は、観光資源としての活用や環境教育の推進が地域経済の活性化に貢献しており、持続可能な地域再生のモデルとなっている。これらは、トキの放鳥事業にも応用可能であり、能登地方における包括的な地域再生活動の設計に役立つと考えられる。



【講演会の様子:菊池氏】

(3) グループディスカッション

参加者を3つのグループに分け、「生息環境の確保(生物の観点)」、「地元の理解(人の観点)」、「地域活性化(金の観点)」のテーマで議論を行った。短い時間ではあったが、各グループで活発に議論が行われた。

5. おわりに

トキの野生復帰は、単なる生物保全事業にとどまらず、「地域再生」「人と自然の共生」「次世代への教育」など、多面的な意義を持つ。トキの放鳥は、地域の復興と環境共生のモデルケースとして、今後の能登地域づくりにおいて重要な役割を果たすことが期待される。

最後に、ご多忙の中、ご講演いただいた講師の皆様に厚く御礼申し上げます。

【開催報告】皆でフックアップ! 北陸建コン若手エンジニア 2025

〈技術部会 若手技術者ワーキンググループ〉

1. はじめに

建設コンサルタントの仕事は、社会的使命感が強く、やりがいの大きい魅力的な仕事である一方で、若手技術者の確保・育成が大きな課題となっています。未来の活力ある業界を実現するためには、次世代を担う若手技術者が、自らのキャリアを主体的に考えることや、業界の魅力を広く伝えていくことが欠かせません。また、担い手確保においては、女性技術者の増加や離職防止が重要なテーマとなっています。

このような背景から、技術部会若手技術者ワーキンググループでは、北陸支部の若手技術者が集まり、日々の仕事や業界の魅力、自分の考えなどについて自由に意見交換が出来る場を創ることを目的に「皆でフックアップ! 北陸建コン若手エンジニア」を企画・開催しました。

～「フックアップ」に込められた意味～

参考となる良い技術や考えは素直に「良い」と声に出して“褒め合う”ことで、普段はライバル他社という垣根を越え、これからの業界を担う若手技術者の技術力やモチベーションを“引き上げて”いこうという意味があります。

2. 開催日時・プログラム

令和7年11月7日に金沢市のITビジネスプラザ武蔵で開催し、北陸支部の若手技術者43名（男性26名・女性17名）が参加しました。女性技術者の比率は例年2割程度でしたが、今年は約4割に倍増し、活気ある講習会となりました。

講習会は以下の3部構成で実施しました。

[第1部]講演：「育児と仕事の両立を考える」

講師：大日本ダイヤコンサルタント(株)

なでしこ会 田坂智美氏・北浦直子氏

[第2部]講演：「地域を支える建コンの魅力」

講師：(株)新潟博報堂 中村文香氏

[第3部]ディスカッション「建コンの魅力発信」

3. 開催概要

[第1部] 講演「育児と仕事の両立を考える」

建コン業界には女性社員が少なく、相談相手を見つけるににくい環境に加え、ロールモデルとなる先輩社員も少ないとことから、長期的なキャリア継続のイメージ構築が困難であることが課題として挙げられます。

第1部では、大日本ダイヤコンサルタント(株)なでしこ会代表の田坂様より、女性社員がより働きやすい環境の実現に向けた取り組み（産休育休おたすけBOOKの整備、女性のネットワーク形成…等）についてご紹介を頂きました。参加者からは、「自社では女性の働き方に関する施策が十分に進んでいないため、制度整備において苦労した課題や、経営層からどのように理解を得たか知りたい」といった具体的な意見が挙げられるなど、若手技術者自身が制度の改善・実現に向けて動く”意識付けのきっかけ”となりました。

また、育児と技術者としての成長を両立された先輩技術者の北浦様より、育休中・復帰後の働き方、そして技術者としてのスキルアップの道のりについて、具体的な体験談を交えてご講演頂きました。ライフイベントを控えた後輩技術者への心強いアドバイスを頂き、参加者からは「自身の方向性を考えることが出来た」「お互いのサポートの仕方についても学べた」等の声が挙げられ、実りある学びの機会となりました。



図1 なでしこ会による講演の様子

[第2部] 講演「地域を支える建コンの魅力」

第2部では、リサーチやデザイン分野を得意とし、道路行政の広報にもご協力を頂いている(株)新潟博報堂の中村様をお招きし、「地域を支える建コンの魅力」「魅力の発信方法」をテーマにご講演を頂きました。

建コンの仕事は調査・設計・維持管理まで幅広く関わり、「地域の未来を創る魅力的な仕事」である一方で、施工が分離発注であるため、一般人の目に触れずに認知度が低いことが、採用活動にも影響している可能性があります。地域や住民と連携して仕事に取り組むことや、企業や建コン業界としての情報発信・PRを強化することにより、認知向上を目指すことが望ましいとアドバイスを頂きました。また、第3部でのポスター制作に向け「伝える戦略」のポイントをご伝授頂きました。

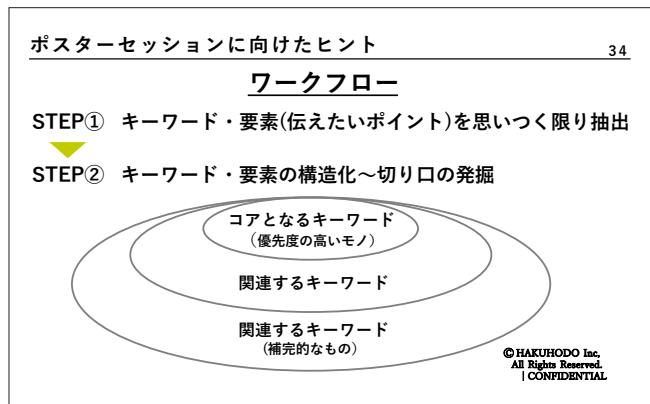


図2 ポスター制作のワークフロー

[第3部] ディスカッション「建コンの魅力発信」

ディスカッションでは、「建コンの魅力発信について考えてみよう！」をテーマとし、参加者各自が「誰かに伝えたい仕事の風景」に関する写真を持ち寄り、ポスター制作を行いました。

最初に、専門分野の異なる4~5人のグループに分かれ、各自が持ち寄った写真を共有し、発信したい意図や背景を班員にご説明頂きました。聞き手によって「魅力に感じるポイント」が異なるという気付きを活かし、対話を通じて各々が持ち寄った写真の潜在的な魅力について深掘りしました。

次に、その魅力を届けるべき「相手」を具体的にイメージし、短い言葉で心をつかむフレーズを検討し、班で意見を交換しながら1枚のポスターへと落とし込んでいきました。

最後に、完成したポスターの発表会を実施しました。どのようなターゲットに向け、何を工夫したのかについて熱意のこもったプレゼンテーションが行われ、学びの多い時間となりました。

第3部のセッションを通し、同業他社の同年代の技術やプレゼンスキルを感じ、参加者はお互いに刺激を受けていました。



図3 ポスター制作の様子

4. おわりに

本会は、講師、参加者の皆様のご協力で実り多いイベントにすることができ、ここに感謝の意を表します。参加者からは、「同年代の若手から刺激を受けた」「自分のやりがいを再認識できた」など意見がありました。普段は、ライバルにもなる若手技術者同士が、共通のテーマで意見交換し、考えを共有することで、同じ業界で働く仲間・同志として交流を深めることができたと感じています。今後も、地域社会の発展に貢献できる建コン業界を目指し、若手技術者の交流・育成に取り組んで参りますので、是非ご参加ください。



図4 参加者全員による記念撮影

新潟県 小学校・中学校・高校 「土木出張PR」参加報告

〈技術部会 若手技術者ワーキンググループ〉

1. はじめに

新潟県では、新潟県土木部・新潟県建設業協会・新潟県測量設計業協会・建設コンサルタント協会北陸支部の共催で、建設産業の仕事内容を小中高校生に紹介する「土木出張PR」を実施しています。当支部では、広報委員会及び若手技術者ワーキンググループがPRを担当しています。

開催学校数は年々増加しており、令和7年度は中学生を中心とし、34校・約1,700人を対象に実施しました。

表1 新潟県土木出張PR開催状況

年度	中学校		高等学校		小学校		合計	
	学校数	対象者数	学校数	対象者数	学校数	対象者数	学校数	対象者数
平成28年度	4校	350人	-	-	-	-	4校	350人
平成29年度	11校	548人	3校	126人	-	-	14校	674人
平成30年度	20校	1239人	1校	57人	-	-	21校	1296人
令和元年度	20校	1159人	2校	118人	-	-	22校	1277人
令和2年度	14校	709人	1校	23人	-	-	15校	732人
令和3年度	31校	2213人	2校	47人	-	-	33校	2260人
令和4年度	34校	1832人	3校	81人	-	-	37校	1913人
令和5年度	33校	1794人	4校	94人	1校	37人	38校	1925人
令和6年度	37校	1943人	6校	170人	-	-	43校	2113人
令和7年度 (暫定値)	30校	1578人	1校	40人	3校	76人	34校	1694人

(平成28年度～令和6年度：新潟県HPより、令和7年度(暫定値)：建コン調べ)

土木出張PRは、以下①・②のプログラムで構成されています。

①仕事内容紹介（各団体10分程度）

②土木体験学習（概ね1時間程度）

令和4年度まで、当協会は①のみを担当していましたが、令和5年度より②土木体験学習に取り組んでおり、令和7年度は1校で実施しました。

2. 「①仕事内容紹介」について

当協会では、概ね30年先の北陸の地域づくりを描いた「北陸インフラづくりの提言」のPR動画やパンフレットを用い、建設コンサルタントが関わる具体的な仕事内容を説明しました。中学生・高校生からすると、土木の仕事は現場仕事のイメージが強く、建コンの仕事は認知度が低いと感じます。出張PR開催後の生徒アンケートでは、「調査・設計など男性も女性も活躍出来る仕事だと分かった」「ドローンでの測量やパソ

コンでの設計・デザインなど最新の機械を活用しており、面白そう」などの回答をいただきました。地域の生活を支える「やりがいのある仕事」に興味を持つ生徒も多く、仕事内容や労働環境への理解にも繋がっていると感じます。



図1 PR動画「北陸インフラづくりの提言」

表2 仕事内容紹介に関する生徒の意見・反応

・力仕事と思っていたが、調査・設計や測量など、男性も女性も活躍出来る仕事だと分かった。職業を決めるときの視野が広がった。
・土木の具体的な仕事は知らなかつたが、身近な生活を支えたり、災害の時に活躍したりと、やりがいのある仕事だなと思った。
・女性も多く活躍していることを知り、将来の選択肢が増えた。
・行政と測量、工事、設計の人が一丸となって一つのものを作っていると知り、普段見える風景や日常の見え方が変わり、土木に興味が湧いた。
・ドローンでの測量や、パソコンを使っての設計やデザインなど、最新の機械を活用していて、面白そうだと思った。

(生徒アンケートより)

3. 「②土木体験学習」について

(1) 概要

将来選択する職種として、建設コンサルタントへの興味や関心、好奇心の意識づけを目的に、土木体験学習を試行しました。

日時：令和7年6月4日（金）14:00～15:30

対象：新発田市川東中学校 2年生25名

(2) 実習内容

体験学習では、ペーパーブリッジ製作を行った後、紙の橋を実際の橋梁に置き換えて設計の仕事を紹介しました。

①ペーパーブリッジ製作

ダンボールで予め作成した三角柱を横にし、支点・橋台に見立て、その上に載せる「橋げた」をA4用紙10枚程度とセロハンテープで作成し、耐荷重を競うペーパーブリッジを製作しました。製作ヒントは「紙を折ったら？丸めたら？」程度とし、自由な発想で橋げたの形を考えていきました。

橋台の間に橋脚を増やしたり、ダンボールの断面から発想を得て橋げたをギザギザに折るなど、様々なアイデアが見られました。

製作体験の後、脆弱な箇所を橋脚や部材により補強する等、強い橋の作り方について解説し、「考えること」の楽しさや、興味を引き出すことが出来ました。

②橋梁設計の仕事

桁橋以外の橋梁形式の紹介や実際の橋梁設計時の検討ポイント（交差条件、橋のデザイン、経済性、工事の安全性等）について説明しました。

[検討ポイント例：①交差条件]

- ・紙の橋では、橋脚を増やすほど強い構造となるが、実際の橋梁設計では河川の通水を阻害しないように橋脚配置を検討する。

[検討ポイント例：②経済性]

- ・橋梁の材料は高価であるため、可能な限り紙の枚数を減らして効率的な形について検討する。

製作体験の後に、実際の橋梁設計に置き換えて解説することで、橋梁の上部構造を設計する・考えることを体験して貰うことが出来ました。体験を通じ、建設コンサルタントの設計の仕事について生徒の理解が深まったように感じます。

表3 体験学習に関する感想・意見

・ペラペラな紙でも、形の工夫次第でペットボトルを支えられることに驚いた。強い形を何度も実験して探すのが楽しかった。
・実際の橋づくりも、限られた材料や予算の中で、車を支えられる橋の形を検討していると知った。建コンさんが作ったペーパーブリッジは、紙の枚数も少なく、デザインも綺麗だなと思った。
・橋脚をたくさん作って支えたけど、実際の橋の設計だと、水や木の通り道が無くなることを知り、橋の設計は難しいなと感じました。

(生徒アンケートより)



図2 ペーパーブリッジの製作状況

3. さまざまな橋の形

③アーチ橋（きょう）

▶曲がりを付けた「アーチ」により支えられる構造



図3 身近な橋梁形式の紹介(例:アーチ橋)

4. 橋の“設計”のしごと

設計のポイント：⑤お金（工事費：橋を作るとき）

■実際の橋は 数千万～数億円！

■できるかぎり、少ない紙の枚数（材料）で作りたい。



図4 橋梁設計時の検討ポイント（例：経済性）

4. おわりに

建設コンサルタントを含む建設業界の担い手不足は、年々深刻化しており、今後の技術維持・継承のためには担い手の確保が益々重要となります。

土木出張PRの授業後には、「生活を支えること」にやりがいや魅力を感じる生徒も多く、本PRが土木業界のイメージ改善や仕事内容への理解に繋がっていることを感じます。

次年度以降も継続的にこのようなイベントを行い、次世代に土木の魅力を伝えることで、将来の担い手確保に繋げていきたいと考えています。

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 北陸支部

会員名簿

令和8年2月1日現在

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
旭調査設計(株)		950-0908 新潟市中央区幸西1-1-11	025-245-8345 025-245-8349
アジア航測(株)	新潟営業所	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-28 パーク新潟東大通ビル	025-243-3246 025-247-7969
(株)アルゴス		944-0009 妙高市東陽町1-1	0255-72-3448 0255-72-9426
アルスコンサルタンツ(株)		920-0068 金沢市戸板3-16	076-248-4004 076-248-4174
いであ(株)	北陸支店	950-0087 新潟市中央区東大通2-5-1 カープ新潟ビル8F	025-241-0283 025-243-5650
エアロトヨタ(株)	新潟支店	950-0088 新潟市中央区万代2-3-6 新潟東京海上日動ビル2F	025-249-1150 025-249-1155
(株)エイト日本技術開発	新潟事務所	950-0087 新潟市中央区東大通2-1-20 ステーションプラザ新潟ビル8F	025-256-8611 025-256-8612
(株)エース	石川営業所	922-0105 加賀市山中温泉泉町159番地	0761-78-1378 0761-78-1378
エヌシーアイ(株)		950-0954 新潟市中央区美咲町1-7-25	025-285-8540 025-285-3531
応用地質(株)	北信越支社	950-0864 新潟市東区紫竹7-27-35	025-274-5656 025-271-6765
大原技術(株)		940-0856 長岡市美沢3-511	0258-35-4511 0258-36-3254
(株)オリエンタルコンサルタンツ	北陸支社	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-26 プレイス新潟4F	025-244-7881 025-244-7387
開発技建(株)		950-0914 新潟市中央区紫竹山7-13-16	025-245-7131 025-245-7132
(株)開発技術コンサルタント		951-8133 新潟市中央区川岸町3-33-3	025-233-0204 025-233-6465
川崎地質(株)	北陸支店	950-0914 新潟市中央区紫竹山5-7-5	025-241-6294 025-241-6226
(株)基礎建設コンサルタント	北陸支店	921-8146 金沢市額乙丸町ニ200番地	076-220-7990 076-220-7991

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
基礎地盤コンサルタンツ(株)	北陸支店	950-0925 新潟市中央区弁天橋通1-2-34 尾山ビル	025-257-1888 025-257-1880
北建コンサル(株)		933-0941 高岡市内免3-3-6	0766-23-3666 0766-23-3987
(株)キタック		950-0965 新潟市中央区新光町10-2	025-281-1111 025-281-0002
(株)協和		933-0838 高岡市北島1406	0766-22-2100 0766-22-7602
(株)協和コンサルタンツ	新潟営業所	940-0061 長岡市城内町3-8-7 蒼柴ビル801	025-889-8302 025-889-8304
(株)クリエイトセンター		951-8133 新潟市中央区川岸町2-8-1	025-232-7121 025-232-7130
(株)クレアリア	北陸支店	950-0973 新潟市中央区上近江2-9-19 レジデンス近江101	025-288-6893 025-288-6894
(株)建成コンサルタント		933-0014 高岡市野村284-1	0766-25-6097 0766-25-5697
(株)建設環境研究所	新潟支店	950-0915 新潟市中央区鎧西1-7-5 エスポワール新潟1F	025-282-7385 025-282-7387
建設技研コンサルタンツ(株)		933-0007 高岡市角602-1	0766-21-6126 0766-21-6192
(株)建設技術研究所	北陸支社	950-0088 新潟市中央区万代4-4-27 メットライフ新潟テレコムビル	025-245-3883 025-241-9082
(株)構造技研新潟		950-0932 新潟市中央区長潟1204-2	025-288-6800 025-288-6824
国際航業(株)	新潟支店	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-26 プレイス新潟	025-247-0318 025-241-4146
(株)国土開発センター		921-8033 金沢市寺町3-9-41	076-247-5080 076-247-5090
国土防災技術(株)	新潟支店	950-2014 新潟市西区小針西2-5-29	025-260-2245 025-260-7522
五大開発(株)		921-8051 金沢市黒田1-35	076-240-6588 076-240-6575
(株)三協技術	北陸支店	920-0869 金沢市上堤町2-37 金沢三栄ビル	076-256-5530 076-256-5531

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
サンコーコンサルタント(株)	北陸支店	950-2055 新潟市西区寺尾上4-4-15	025-260-3141 025-268-4950
(株)上智		939-1351 砺波市千代176-1	0763-33-2085 0763-33-2558
(株)スリーエスコンサルタンツ	北陸支社	926-0867 七尾市桜町12	0767-58-5505 0767-58-5506
相互技術(株)		950-0994 新潟市中央区上所2-11-14	025-283-0150 025-283-0152
大日本ダイヤコンサルタント(株)	北陸支社	930-0029 富山市本町3-21 損保ジャパン富山ビル	076-415-7800 076-415-7795
館下コンサルタンツ(株)		939-3553 富山市水橋的場234	076-478-0090 076-478-1190
中央開発(株)	北陸支店	950-0982 新潟市中央区堀之内南3-1-21 北陽ビル	025-283-0211 025-283-0212
(株)長大	北陸事務所	950-0965 新潟市中央区新光町6-1 興和ビル6F	025-288-0271 025-288-0273
(株)千代田コンサルタント	新潟営業所	950-0911 新潟市中央区笹口1-19-31	025-244-8445 025-249-4776
(株)ティーネットジャパン	北陸支社	951-8061 新潟市中央区西堀通6番町866 NEXT21ビル	025-226-4330 025-226-3033
(株)東京建設コンサルタント	北陸支社	950-0087 新潟市中央区東大通1-2-23 北陸ビル	025-248-3870 025-248-3877
東京コンサルタンツ(株)	新潟支店	950-0912 新潟市中央区南笹口1-1-12 クラスターナインビル8F	025-246-1827 025-246-7463
(株)東北開発コンサルタント	新潟営業所	950-0154 新潟市江南区荻曽根1-5-15	025-382-6106 025-381-3144
(株)東洋設計		920-0016 金沢市諸江町中丁212-1	076-233-1124 076-233-1224
ナチュラルコンサルタント(株)		921-8066 金沢市矢木2-147	076-246-1170 076-246-4493
(株)ナルサワコンサルタント		950-0964 新潟市中央区網川原1-21-11	025-282-2070 025-284-7993
NiX JAPAN(株)		930-0857 富山市奥田新町1-23	076-464-6520 076-464-6671

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
株日本インシーク	新潟支店	950-0087 新潟市中央区東大通1-3-8 明治安田生命新潟駅前ビル5F	025-246-1320 025-247-3740
(株)日本海コンサルタント		921-8042 金沢市泉本町2-126	076-243-8258 076-243-0887
日本工営(株)	新潟支店	950-0962 新潟市中央区出来島1-11-28	025-280-1701 025-283-0898
(株)日本港湾コンサルタント	北陸事務所	950-0087 新潟市中央区東大通2-5-8	025-243-0431 025-241-1806
(株)ニュージェック	北陸支店	950-0911 新潟市中央区笹口2-10-1 WIN21 4F	025-243-4471 025-243-4472
パシフィックコンサルタンツ(株)	北陸支社	950-0917 新潟市中央区天神1-1 プラーカ3 6F	025-247-1341 025-246-1005
(株)パスコ	新潟支店	950-0088 新潟市中央区万代4-4-27 メットライフ新潟テレコムビル5F	025-243-0051 025-241-8654
(株)プラネット・コンサルタント		920-0017 金沢市諸江町下丁372	076-255-0630 076-255-0672
北電技術コンサルタント(株)		930-0858 富山市牛島町13-15	076-432-9936 076-432-4280
北陸コンサルタント(株)		939-8213 富山市黒瀬192	076-493-7717 076-493-7720
三井共同建設コンサルタント(株)	北陸事務所	951-8067 新潟市中央区本町通7番町1153 新潟本町通ビル	025-224-1285 025-224-1286
(株)村尾技建		950-0948 新潟市中央区女池南2-4-17	025-284-6100 025-283-0368
(株)村尾地研		939-8262 富山市塙原150	076-429-2511 076-429-2603
明治コンサルタント(株)	北陸支店	950-2002 新潟市西区青山1-1-22 アルメントビル	025-265-1122 025-265-1126
八千代エンジニヤリング(株)	北陸支店	950-0088 新潟市中央区万代1-1-1 朝日生命新潟ビル	025-243-5454 025-243-5883
(一社) 北陸地域づくり協会		950-0197 新潟市江南区亀田工業団地2-3-4	025-381-1020 025-383-1205
(一財) 新潟県建設技術センター		950-1101 新潟市西区山田2522-18	025-267-4804 025-267-4854

役員・委員会名簿

令和8年2月1日現在

北陸支部役員			
支部長		吉野 清文	開発技建(株)
副支部長		小見 直樹	エヌシーイー(株)
副支部長		中田 淳之介	大日本ダイヤコンサルタント(株)
副支部長		新家 久司	(株)国土開発センター
支部理事	運営委員長	齋藤 真晴	開発技建(株)
ク	運営委員	黒木 康生	(株)日本海コンサルタント
ク	運営委員	笛谷 輝彦	(株)国土開発センター
ク	運営委員	大浜 正人	(株)建設技術研究所
ク	運営委員	岩澤 弘和	(株)構造技研新潟
ク	運営委員	榮 知之	北陸コンサルタント(株)
ク	運営委員	須田 玲	エヌシーイー(株)
事務局長		佐々木 清一	建設コンサルタント協会北陸支部
支部監事		佐々木 大介	(株)ナルサワコンサルタント
ク		高野 一博	大原技術(株)

対外活動部会			
	部会長	吉野 清文	開発技建(株)
	部会員	小見 直樹	エヌシーイー(株)
	部会員	中田 淳之介	大日本ダイヤコンサルタント(株)
	部会員	新家 久司	(株)国土開発センター
	部会幹事	飛田 潤一	開発技建(株)
	部会員	田中 義明	大日本ダイヤコンサルタント(株)
	部会員	長森 孝司	(株)日本海コンサルタント
	部会員	渡部 長務	エヌシーイー(株)
	部会員	山田 幸男	(株)建設技術研究所
新潟地域委員会	委員長	岩澤 弘和	(株)構造技研新潟
ク	委員	中田 一男	開発技建(株)
ク	委員	坂西 和也	エヌシーイー(株)
ク	委員	外川 忠利	(株)キタック
ク	委員	高橋 秀典	(株)クリエイトセンター
ク	委員	高橋 幸彦	(株)開発技術コンサルタント
富山地域委員会	委員長	水口 功	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	森井 昭二	北陸コンサルタント(株)
ク	委員	坂原 徹	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	大蔵 欣司	(株)建成コンサルタント
ク	委員	久保 嘉春	(株)上智
石川地域委員会	委員長	新家 久司	(株)国土開発センター
ク	委員	長森 孝司	(株)日本海コンサルタント
ク	委員	二俣 秀	(株)国土開発センター

総務部会			
	部会長	清原 宏二	開発技建(株)
総務委員会	委員長	浜辺 良彦	相互技術(株)
ク	委員	佐藤 雄一	(株)構造技研新潟
ク	委員	熊倉 孝次	(株)クリエイトセンター
ク	委員	高橋 宏明	開発技建(株)
ク	委員	泉 英樹	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	河原 健二	(株)日本海コンサルタント
倫理・法令委員会	委員長	新田川 貴之	(株)国土開発センター
ク	委員	飯田 雅之	開発技建(株)
ク	委員	南場 肇	エヌシーイー(株)
ク	委員	清水 英樹	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	水野 慎介	(株)日本海コンサルタント

技術部会			
	部会長	神田 和久	開発技建(株)
統括技術委員会	委員長	藤巻 智之	開発技建(株)
ク	委員	真嶋 利寿	エヌシーイー(株)
ク	委員	大塚 秀行	(株)キタック
ク	委員	西村 治	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	池渕 稔	東京コンサルタンツ(株)
ク	委員	武沢 直貴	(株)日本海コンサルタント
ク	委員	加藤 穀	(株)クリエイトセンター
ク	委員	高橋 辰夫	(株)開発技術コンサルタント
河川・砂防委員会	委員長	伊藤 信哉	開発技建(株)
ク	委員	阿左美 敏和	(株)建設技術研究所
ク	委員	西川 幸成	(株)国土開発センター
ク	委員	藤原 大佑	五大開発(株)
ク	委員	越野 謙一	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	浦田 齊	エヌシーイー(株)
ク	委員	波多野 勝弘	相互技術(株)
ク	委員	中島 康喜	(株)開発技術コンサルタント
道路委員会	委員長	木村 浩	エヌシーイー(株)
ク	委員	須佐 慎	開発技建(株)
ク	委員	吉田 要	(株)クリエイトセンター
ク	委員	相田 守	(株)キタック
ク	委員	木下 裕康	(株)国土開発センター
ク	委員	美作 知弘	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委員	藤本 勇一	(株)東洋設計

橋梁委員会	委員長	脇坂 哲也	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	吉 村 訓 和	開発技建(株)
ク	委 員	渡 邊 敦	エヌシーイー(株)
ク	委 員	門 口 健 吾	(株)キタック
ク	委 員	佐 藤 良 晴	(株)構造技研新潟
ク	委 員	浦 修 造	(株)国土開発センター
ク	委 員	鷹 西 輝	(株)東洋設計
ク	委 員	寺 田 直 樹	(株)開発技術コンサルタント
ク	委 員	塚 嶋 雅 則	東京コンサルタンツ(株)
トンネル委員会	委員長	須 貝 浩	エヌシーイー(株)
ク	委 員	今 度 充 之	東京コンサルタンツ(株)
ク	委 員	麻 田 正 弘	アルスコンサルタンツ(株)
ク	委 員	松 尾 内 助	(株)キタック
ク	委 員	長谷川 哲 也	サンコーコンサルタント(株)
ク	委 員	辻 本 勝 彦	(株)国土開発センター
都市計画委員会	委員長	岩 渕 和 有	エヌシーイー(株)
ク	委 員	村 田 亨	開発技建(株)
ク	委 員	森 川 大 輔	(株)国土開発センター
ク	委 員	酒 井 信 次	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	眞 島 俊 光	(株)日本海コンサルタント
ク	委 員	白 井 美和子	(株)ナルサワコンサルタント
建設環境委員会	委員長	稻 葉 弘 之	アルスコンサルタンツ(株)
ク	委 員	若 尾 明 弘	エヌシーイー(株)
ク	委 員	八 鳥 直 哉	開発技建(株)
ク	委 員	三 浦 大 輝	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	上 田 拓 哉	(株)日本海コンサルタント
ク	委 員	辰 橋 浩 二	(株)国土開発センター
ク	委 員	廣 井 敏 樹	大原技術(株)
若手技術者ワーキンググループ	リーダー	小 倉 匡 介	開発技建(株)
ク	委 員	柴 田 悠 平	(株)日本海コンサルタント
ク	委 員	笛 川 康 雄	(株)国土開発センター
ク	委 員	庭 山 雄太郎	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	小 口 祐 樹	(株)キタック
ク	委 員	本 間 千 悠	(株)構造技研新潟
ク	委 員	佐 久 間 佑 多	相互技術(株)
ク	委 員	楳 井 将 真	エヌシーイー(株)
ク	委 員	米 多 宏	北陸コンサルタント(株)

広報部会			
	部会長	齋藤 浩幸	(株)キタック
広報委員会	委員長	石塚 英洋	エヌシーイー(株)
ク	委 員	飯 田 互	(株)開発技術コンサルタント
ク	委 員	加 藤 克 裕	(株)キタック
ク	委 員	高 澤 正 浩	(株)構造技研新潟
ク	委 員	本 間 健 太 郎	(株)ナルサワコンサルタント
ク	委 員	村 上 啓	開発技建(株)
ク	委 員	本 間 拓 海	(株)建設技術研究所
ク	委 員	泉 田 洋	八千代エンジニアリング(株)
ク	委 員	稻 積 秀 幸	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	伊 東 輝 往	北建コンサル(株)
ク	委 員	吉 村 誠 一	(株)国土開発センター
ク	委 員	坂 上 圭 吾	アルスコンサルタンツ(株)
会誌編集委員会	委員長	太 田 博 昭	(株)国土開発センター
ク	委 員	山 田 嘉 貴	(株)クリエイトセンター
ク	委 員	熊 倉 晃	旭調査設計(株)
ク	委 員	澤 田 伸 也	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	古 橋 伸 彦	(株)日本海コンサルタント

災害対策部会			
	部会長	吉野 清文	開発技建(株)
新潟現地対策本部	本部長	吉野 清文	開発技建(株)
ク	副本部長	小見 直樹	エヌシーイー(株)
ク	技術総括指揮者	高橋 邦夫	開発技建(株)
ク	副責任者	坪井 雄一郎	開発技建(株)
富山現地対策本部	本部長	吉野 清文	開発技建(株)
ク	副本部長	中田 淳之介	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	技術総括指揮者	坂下 学	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	副責任者	古池 豊	大日本ダイヤコンサルタント(株)
石川現地対策本部	本部長	吉野 清文	開発技建(株)
ク	副本部長	新家 久司	(株)国土開発センター
ク	技術総括指揮者	七郎丸 一孝	(株)国土開発センター
ク	副責任者	西川 幸成	(株)国土開発センター
災害対策委員会	委員長	高橋 邦夫	開発技建(株)
ク	委 員	青木 和 之	エヌシーイー(株)
ク	委 員	飛 田 潤 一	開発技建(株)
ク	委 員	増 山 繁 雄	北陸コンサルタント(株)
ク	委 員	坂 下 学	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	田 中 義 明	大日本ダイヤコンサルタント(株)
ク	委 員	七郎丸 一 孝	(株)国土開発センター
ク	委 員	武 沢 直 貴	(株)日本海コンサルタント
ク	委 員	長 森 孝 司	(株)日本海コンサルタント

編集後記

今年度より会誌編集委員を務めさせていただくことになりました熊倉と申します。まだまだ不慣れではありますが、皆さまのお力をお借りしながら、少しでも会誌づくりに貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

私と土木との関わりは、中学校を卒業して土木科のある学校へ進学したことに始まります。振り返ってみると、あっという間に40年近くが経ち、気がつけば土木は私の人生の大きな柱になっていました。これまで多くの方に支えていただいた業界に、少しでも恩返しができればという思いで務めさせていただきます。

昭和60年頃に土木科へ入学した当時、40名のクラスに女子学生は一人もおらず、先生からは「土木は4K（きつい・汚い・危険）の業界だぞ」と言われ、社会的なイメージは決して良いものではないのだと感じた記憶があります。

しかし、時代は本当に大きく変わりました。まだ道半ばではありますが、「新3K（給料が良い・休日が取れる・希望や夢が持てる）」が掲げられ、働く環境は確実に良くなっています。現場では女性の姿も多く見られるようになりました。また、子どもたちに土木の魅力を伝えるための出前講座「土木出張PR」など、業界全体でイメージアップに取り組んでいることも嬉しい変化です。

拙い文章ではありますが、今回は私自身の歩みや思いを少しだけ紹介させていただきました。今年一年、災害のない穏やかな年となり、皆さまが健やかに過ごされることを心より願っております。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

熊倉 晃

発 行／一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 北陸支部
〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1 興和ビル7階
TEL 025-282-3370 FAX 025-282-3371

会誌編集委員会
委員長／太田博昭
委 員／山田嘉貴 熊倉晃 澤田伸也 古橋伸彦



発行

一般社団法人 建設コンサルタント協会 北陸支部

〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1 興和ビル7階

TEL 025-282-3370 FAX 025-282-3371

<https://hr-jcca.jp/>